

ココロ  
HEART



アートって、書けるんだ。

アート ← コトバ  
ART ← WRITE

第2回 高校生

アトライター大賞

優秀作品集

 筑波大学 *University of Tsukuba*

2007-2008

## 目次

選考結果	3
プロジェクト概要	4
選考経過	5
選考委員講評	6 - 9
大賞	10 -15
特別賞	16 -17
優秀賞	18 -63

美術について記述することは、芸術や文化の所産としての造られたモノがどのようなものであるか、思い至り、理解することでもあり、美術作品や制作について、その感動を、己が知識をもって語ることは、互いの感性を刺激し、豊かなコミュニケーションを育むものである。



近代になって、優れた美術品は、その多くが人類の共有財産として公開され、文豪や評論家、そして美学、美術史、哲学者や教育者、そしてメディアによって語られ、讃えられて来た。それこそが今や現代文化を支える重要なファクターの一つと言ってよいであろう。

筑波大学では2004年から「芸術環境形成支援のためのアート・ジャーナリスト養成プロジェクト」をスタートし、芸術文化の将来を支える高校生に向けて、アトライター大賞を創設し、今回で第2回を迎えることとなった。審査に至るまでの事務総括は直江俊雄准教授が担い、審査については五十殿利治人間総合科学研究科芸術専攻長を中心に、芸術学専攻の同僚教員によって進めてきた。

応募の作品から学ぶことも多い。高校生が鑑賞し、制作し、体験したことを記述したエッセーには、現代の芸術や教育の置かれている環境も窺うことができる。恐らく、芸術カリキュラムや将来の芸術教育のあり方についても示唆を得ることができたのではないだろうか。

積極的に応募していただいた高校生の皆さん、ご協力をいただいた高校教員の方々、長時間にわたって査読いただいた学外の審査員各位に篤くお礼申し上げます。

守屋正彦

筑波大学大学院人間総合科学研究科教授

「アート・プロフェッショナル養成における人間力の実践的育成」教育プロジェクト代表

## 第2回高校生アトライター大賞応募規定（抜粋）

趣旨 アートについて書く高校生のためのコンテストを開催します。執筆を通してアートの意味を考え、新しい文化の創造と支援を担う若い感性を育みます。

課題 アートについて経験したことをもとに、自分の考えを伝える文章を書く。

部門 制作体験 自分自身が作品をつくった体験を振り返って書く。  
作品探究 芸術家等がつくった作品について書く。  
芸術支援 アートを通して人々を支援する活動について書く。

選考委員 穴澤秀隆（『美育文化』編集長） 奥村高明（国立教育政策研究所教育課程調査官） 光田由里（渋谷区立松濤美術館学芸員） 五十殿利治（筑波大学教授） 斉藤泰嘉（筑波大学教授）

学内選考委員 岡崎昭夫 長田年弘 寺門臨太郎 直江俊雄 守屋正彦（以上、筑波大学教員）ならびに筑波大学学生代表

応募締切 2007年10月15日（月） 結果発表 2007年12月 （書式・提出方法・問い合わせ先等省略）

## 第2回高校生アトライター大賞 優秀作品集

編集 高校生アトライター大賞事務局 直江俊雄

発行 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻 筑波大学アートフロンティアプログラム（茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学芸術学系）  
平成20年2月9日

本書は「アート・プロフェッショナル養成における人間力の実践的育成—筑波大学アートフロンティアプログラムへの運営参加を通して」の一環として刊行されました。  
著者及び発行者の許可なく本書の転載を禁じます。©筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻 2008

# 第2回高校生アールライター大賞 選考結果

平成19年12月 第2回高校生アールライター大賞選考委員会

応募総数 214 編 各賞の中の配列は名前の五十音順であり、順位ではありません。

## ■大賞 (3名、著者名の五十音順)

埼玉県	芸術総合高等学校	安西 陽香	全てが嘘っばい
北海道	立命館慶祥高等学校	上田 千尋	水玉 Impact
北海道	札幌平岸高等学校	高橋 和加奈	そうきち 十歳

## ■特別賞 (1名)

埼玉県	大宮光陵高等学校	須永 夏子	中学生対象の美術展を企画して
-----	----------	-------	----------------

## ■優秀賞 (23名、著者名の五十音順)

東京都	筑波大学附属駒場高等学校	和泉 孝広	ミエナイモノを描く
ニュージーランド	Cashmere High School	岡崎 瀬波	彩る頃に
北海道	立命館慶祥高等学校	岡島 望	ダリ展『芸術の心』
北海道	札幌平岸高等学校	小野山 梢	ふれあうということ
北海道	立命館慶祥高等学校	川本 磨由	自分の感性
神奈川県	横浜雙葉高等学校	北方 萌子	やはりアートが好きだ
北海道	札幌平岸高等学校	栗本 咲	まるで似ていない肖像画から考察する日本人の絵心
宮城県	宮城野高等学校	後藤 あかり	指先の造る世界
東京都	トキワ松学園高等学校	進本 茉莉奈	負けん気 アート魂!
東京都	筑波大学附属駒場高等学校	杉田 陽一郎	「アート」と責任
福井県	藤島高等学校	経澤 建	吾が祖父は書道家である
北海道	札幌平岸高等学校	長尾 茉莉子	同世代のアーティスト
北海道	立命館慶祥高等学校	原口 寛子	平安の体験型美術☆曼荼羅
鹿児島県	鶴丸高等学校	笛田 満里奈	真実を描く
神奈川県	みなと総合高等学校	福岡 仁	落書きメッセージ
北海道	札幌平岸高等学校	福士 弦太郎	絵は心を映す
北海道	札幌平岸高等学校	星川 葉	雨を描く
群馬県	共愛学園高等学校	眞鍋 苑子	心の絵本
東京都	女子美術大学付属高等学校	三浦 菜々子	光の画家、黒の画家
熊本県	大津高等学校	村田 綾乃	その時、そこに感動があった
東京都	筑波大学附属高等学校	山口 知廣	塗り込められた生き物たち
北海道	札幌平岸高等学校	渡邊 瑞紀	命の軌跡
熊本県	大津高等学校	渡邊 佑華	環境と手をつなぐデザイン

## ■学校賞 (7校、学校名の五十音順)

熊本県	大津高等学校
北海道	札幌平岸高等学校
東京都	女子美術大学付属高等学校
東京都	筑波大学附属高等学校
東京都	筑波大学附属駒場高等学校
東京都	トキワ松学園高等学校
北海道	立命館慶祥高等学校



# 教育プロジェクト概要

直江俊雄

第2回高校生アートライター大賞事務局  
筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授

高校生アートライター大賞は、平成16年度から17年度にかけて、本学大学院人間総合科学研究科芸術学専攻(当時)が主催した「芸術環境形成支援のためのアート・ジャーナリスト養成」教育プロジェクトの中で誕生した。大学・大学院教育におけるアートライティングの重要性に着目し、そのカリキュラム開発やジャーナリスト講演会などの企画に取り組みとともに、中等教育における同種の教育開発について、高等学校における教育現場と手を携えて促進する必要が強く認識されたためである。

事前の調査では、絵画などの実技による表現のコンテストは全国で多数行われているが、文章でアートについて伝えるエッセイに関するこうした企画はほとんど前例がなく、未開拓の分野への挑戦が教育現場への新たな側面からの支援策の一つとなることを期待した。

**第1回高校生のためのアートライター大賞**(第2回より「高校生アートライター大賞」と改称)は、平成17年4月に募集開始、10月までに171編の作品が集まり、3名の大賞、1名の特別賞、24名の優秀賞、7校の学校賞を選出し、平成18年1月に表彰式と第1回アートライティング教育研究会を開催した。授業時間数の不足や、文章表現への抵抗感など厳しい条件が予想されただけに、第1回に全国から寄せられた取組みの数々は、困難な中でも新たな芸術教育運動への一つの希

望を感じさせるものであった。

平成18年度から19年度にかけては、新たな教育プロジェクトである「アート・プロフェッショナル養成における人間力の実践的育成」を足踏させ、その中で高等学校教育と連携した二つのアートコンテスト、「第2回高校生アートライター大賞」と「高校生彫刻大賞展2008」の企画を推進した。学群生・大学院生をこうした教育企画に参加させる中で、個人の壁を越え、芸術を通じた社会的リーダーとして育つ上で必須の人間力を養おうとするものである。

この中で「アートライター大賞」に関しては、平成18年度の芸術支援に関わるカリキュラム開発の中で第2回コンテスト実施のための具体的企画を検討し、また対外的には第2回アートライティング教育研究会(平成19年3月)を開催して学校教員、ジャーナリズム、高校生、大学等の間の一層の交流と教育推進が図られた。

**第2回高校生アートライター大賞**(平成19年4月募集開始)は、第1回から継承して「制作体験」「作品探究」「芸術支援」の三つのアプローチを示しながら、内容としては自由に、各自のアート体験に基づいた自分の考えを伝えることを期待している。第1回と大きく異なる点は、すべて電子メールによる電子ファイル提出とした点である。その理由は、第1回に実施コスト、第2回に作品集刊行のための編集(第1回では大賞・特別賞作品だけを掲載し

たが、今回は優秀賞まで全27作品を掲載できた)、第3回に情報科等の協力など、美術以外の教科を含む全校的な運動波及への期待である。本学ホームページからは、応募規定、応募フォーマットのほか、記入例、高校生のためのガイドブック、第1回の選考委員座談会記録などをダウンロードできるようにし、Web上での情報提供体制を一層推進した。

応募された214編の作品はすべて、学内選考委員(7名の教員、大学院「芸術学習支援論」・学群「芸術支援学IIC」受講者)によって、学校名・応募者名を伏せて、いずれの応募者の努力にも敬意を払いつつ読了され、投票によって27編の入賞作品候補を決定し、5名の学内外の選考委員による最終選考会議(11月)に提案された。その後の最終決定については、選考委員長による「選考経過」、また各選考委員による選評を参照していただきたい。

事務局として全運営過程を振り返った印象としては、優秀賞レベルの作品群の充実が挙げられる。大賞レベルに残れるような優れた文章がほかにも数多くその個性を発揮している。その意味でも、この作品集に全優秀賞作品を掲載できたことはまた一つの前進であると考えている。第2回への応募取り組みの中で、どのような成果や課題が生じたのか、今後さらに検討し、発展への道筋を考えていきたい。

(なおえ としお)

## 第2回高校生アトラライター大賞選考経過について

五十殿利治

第2回高校生アトラライター大賞選考委員長  
筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻長

今回の高校生アトラライター大賞は前回上回る数の応募があったおかげで、選考委員会以前の予備的な選考段階（学内選考委員による選考）ではうれしい悲鳴を上げた。

さて、学内選考の結果として国内外からの214編のうちから27編が選出され、これが11月26日の選考委員会で審査対象となった。審査委員長として選考経過について概要を以下に記す。

事前に各委員にはその27編が届けられ、当日はさっそく審議が開始された。まず、27編を概観したときに気付くことは、部門の偏りである。つまり、募集規定には部門として制作体験（自分自身が作品をつくった体験を振り返って書く。）、作品探求（芸術家等がつくった作品について書く。）そして芸術支援（アートを通して人々を支援する活動について書く。）の三つが設定されているが、受賞対象の27編についてみると、明らかに芸術支援部門の数が少ないのであった。もとより規定では各部門に賞を与えるものではないので、このことについては最初に確認をしておく必要があった。

それはそれとして、この芸術支援部門の応募数がそもそも少なかったことも事実であり、次の機会があればこの

部門の応募数の増加を願っている。

確認作業を終えた後で、さっそく選考を開始した。各委員にはあらかじめ配布されているので、まず初めに27編をある程度絞り込むために投票を行ったが、その時点ではかなり委員の間の意見の隔たりが見受けられ、候補作の票も割れた。しかし、選考経過全体としてみるならば、前回のアトラライター大賞選考と同じく、今回も最終的に委員の間で大きな意見の開きはなく、議論を重ねるなかで自然と合意が形成されていった。

大賞選考の過程では、管見のかぎりでは、題材と文章力が受賞者選定の決め手となった。どちらが欠けても、アートエッセイとして、より一般的に文章として読者にはメッセージが届かない。優れた素材も技術なしには優れた作品とならないのと同じである。その点、今回の大賞作品、安西陽香さん（埼玉県・芸術総合高校）「全てが嘘っぽい」、上田千尋さん（北海道・立命館慶祥高校）「水玉 Impact」そして高橋和加奈さん（北海道・札幌平岸高校）「そうきち 十歳」はいずれも受賞にふさわしい内容であり、また優れた文章表現を達成している。それぞれの作品については各委員の選評を一読された



さらに、選考経過のなかで、特別賞を出すということで委員の意見の一致をみた。須永夏子さん（埼玉県・大宮光陵高校）「中学生対象の美術展を企画して」である。予定調和のように、芸術支援部門のエッセイが特別賞となったのであるが、上でも述べたように、審査は部門を度外視して行われたことを申し添えておきたい。

最後に、今後の要望を含めて述べておきたいことは「写真を添えてあったならば」と思わせるエッセイが相当数あったことである。応募規定にも写真図版について触れている。図版を利用することによってさらに美術の理解が深まること、それもまた本コンテストの重要な狙いのひとつといえる。

（おむか としはる）

# 私自身の中にある美術を掘り出そう

穴澤秀隆

第2回高校生アートライター大賞選考委員

『美育文化』編集長



## 「作品」にどんな橋を架けるのか

美術が人類の偉大な文化遺産であることを否定する人は、たぶんいないだろう。

天才や巨匠と呼ばれる芸術家によって、名作とか傑作だのと呼ばれる膨大な作品が遺されている。それらを目にすると、私たちは、がーんと圧倒され、びりびり感動する一方、な～んだか、うんざりもしてしまう。あらゆる場面は、すでに描き切られ、表現し尽くされているように思えてしまうから。

でもね、心配しなくていい。小島よしおという偉大な思想家も言っているじゃないか。「そんなのカンケイない！」肝心なのは、この次に続くフレーズだ。それはきっと、「私は私だ！」あるいは「あなたは私ではない！」という確信だろう。

つまり、一見完璧に見える壮大な美術の殿堂も「私にとってどういう意味をもつのか」という視点がなければ、ただの事物や風景と変わらない。かえって権威が独り歩きを始め、のさばるだけだ。別の言い方をすれば、美術作品という物体が尊いのではない。「作品」と「私」の間に、どんな橋を架けるのかということにこそ価値がある。

そして橋というのは関係性の別名だから、ここには調査や対話が必要。

「て、ことは……」と、いま気づいたあなたはスルドイ。つまり美術というのは、作品自体ではなく、それを解釈する、または、しようとしているあなた自身の中にある。だから大事なんだ。作品について考え、それを「書く」ことが。

## 「自分が感じたこと」が尊い

「作品は私にとってどういう意味をもつのか」という、この点にこだわって私は最終選考に残った27編の論文を読ませてもらった。これは見方によっては、美術の社会的価値や歴史的意味を低く見る捉え方とも言える。でも、それらの知識や見識は、後からいくらでも身につけることが可能だ。ここが美術や芸術に関する論考が他の学問分野と大きく異なっている点だろう。はてな、いいや、そうでもないな。どんな領域であれ、人は構造よりも、その世界の不思議さや魅力に吸い寄せられるだろう。ただ美術や芸術は、その感動がまっすぐ内容につながっている。だからこそ、自分が感じたことが尊い。自信をもってそれを掘り下げることが大切だ。

## それぞれの受賞作品

大賞を受賞された安西陽香さん、上田千尋さん、高橋和加奈さんは、いずれも自分が感じたことにこだわり、そこから文章を書き起こしている点に好感をもった。しかし、3人とも、自分の感覚に対しては不安がいっぱいだ。安西さんは、授業で描いた紫陽花の日本画にもの足りなさを感じていた。そ

こにはつらい体験もあった。しかし、彼女はその体験を経た絵を描きたいと願っている。これは絶対に彼女でなければ意味をなさない決意と言える。上田さんは、草間彌生の強迫観念に引き寄せられていく自分を恐怖する一方、草間の無限に続く水玉に生命の広がりを予見する。この展開力が秀逸。高橋さんは、私が表現したいものは愛犬の何なのかと自問を繰り返す中から、ぬくもりのある表現をつかみ取っていったことがうかがわれる。素朴な表現ながら実感の伝わってくる文章だ。この3人に共通しているのは、表現に苦悶することはあっても、そういう自分を根本的にはキライだとは感じていないことだろう。

特別賞になった須永夏子さんの「中学生対象の美術展を企画して」は、大賞となった3名の自己探究とはちがって、美術の可能性を広げる活動の報告。そのような活動を奨励する意味も込めて特別賞とした。

なお、大賞には至らなかったものの、長尾茉莉子さんの「同世代のアーティスト」には、爽やかな感覚と切実感があった。また、三浦菜々子さんの「光の画家、黒の画家」には卓越した洞察と確かな文章力を感じた。いずれも大賞に加えてもよかった作品である。

(あなざわ ひでたか)

# 〈アートライティング〉というアート

奥村高明

第2回高校生アートライター大賞選考委員  
国立教育政策研究所教育課程調査官



〈アートライティング〉って何でしょう。このことをアートを書く行為をたどることで考えてみましょう。

まず、誰かがアートについて何か書こうとします。このとき、その人の目の前に表れているのは「作品」「自分の表現」「人々の表現活動」「視覚体験」「知識」「参考文献」「これまでの経験」など様々です。これは書くための〈資源〉あり、書き手の目の前に平等に布置されています。それらは単独で存在しているのではなく、お互いに様々な関係性をもっています。例えば、ある「作品」と歴史的な「知識」は結びついています。「自分の表現」と「これまでの経験」も切り離せません。さらに書き出すことで、新しい「知識」が見つかったり、別の「経験」が蘇ったりするかもしれません。書くという行為が新しい〈資源〉を生み出すのです。書き進めれば、それらの関係はいっそう複雑になるので、これらを整理する必要もでます。そこで、書き手は思考力や判断力など様々な力を働かせながら、〈資源〉を取捨選択し、関係を工夫しながら文章をつむいでいきます。そして、その人なりの新しい〈意味〉が見つかり、一つの〈アートライティング〉が完結します。

審査で、最も重視したのが、このこ

とです。表現の過程で、どれだけ新しい〈資源〉を見付け、関連づけ、掘り下げ、その人なりにどのような〈意味〉にたどりついたか。「論文かくあるべし」という枠組みよりも、作者のかけがえのない表現であるかどうかを規準にしました。それが創造、つまりその人にとってのアートであると考えたからです。この観点から、大賞の3作品は、いずれも創造的な表現だったといえるでしょう。

「全てが嘘っぽい」は、絵がうまく書けなかったという出来事から、その原因を友だちの言葉や自分の経験、描くときの思いなどを関連させながら探っていきます。その結果、表現とは何かを訴えることに成功しています。特に「絵を否定することは、その人そのものを否定すること」「絵を認めてもらうことで、一人ではないと思えること」など、表現が個人の表現であると同時に、自分を取り囲む多くの人との関係で成立していることが示されています。だから「人の支えになるような絵を描きたい」という結びは、単に作者の願望というよりも、アートの社会的な働きへの期待ととらえることが適当でしょう。

「水玉 impact」は、作品を鑑賞して得た「衝撃」という自分の感情がどこから生まれるのかを、作品や参考文献などをもとに考察していきます。用いる言葉の一つ一つを吟味し、多様に使い分けながら、水玉の謎を追っていくのですが、その議論は、決して自分の身体感覚や微妙な感情から離れることがありません。そして、水玉の一つ一つを社会という現実存在する彷徨い動く生命の光としてとらえます。その

結果「小さくとも頼りなくとも、存在する魂に意味のないものなど、無い」という結論に達します。それは、この論文自身が、意味のある一つの存在であることを証明するものだといえるでしょう。

「そうきち十歳」は、自分の表現の過程を、時間軸にそって丁寧に語っていきます。それは、材料や用具、表現方法、主題などが、表現の過程で可視化されていくことを明らかにします。また、その都度の感情、身近な人々との関わりなどを描くことによって、表現は〈日常〉という人の〈生き方〉に他ならないことを示しています。それは、制作の悩みを通して「作りたいのはそうきちの外側ではなく内側なのだ」と気付いたこと、母親との関わりから「温かくて、素朴で、身近にある」麻布がそうきちを表す大事な材料になったことなどです。特に、この作品は誰にでも分かる平易な言葉で書かれており、それが十分に説得力をもつことも示しています

審査全体を通して感じたことは、〈アートライティング〉はアートに違いないということです。それは、単にアートを題材としているからではなく、社会に訴える創造活動としてのアートという〈意味〉です。そして、それを可能にする力が、高校生にはきちんとあることに気づかされました。彼らは、しっかり考えて生きています。このことに、大人はもっと謙虚になる必要があると強く思いました。

(おくむら たかあき)

## 第2回高校生アトライター大賞選考に参加して

光田由里

第2回高校生アトライター大賞選考委員  
渋谷区立松濤美術館学芸員



ここに応募された方々は、自分の心に『アート』がどのように関わったかという体験を、それぞれの方法で書き記しておられます。自分の心情を繊細に描き出す力のある文章がたくさんありました。視覚的なイメージを感覚的にぴったりと言い表すことは簡単ではありませんが、さりげない態度で自分の印象を描写するのに、高いセンスを感じさせました。こうした鋭敏な感覚をもった皆さんが『アート』への興味を育てるのはとても実り多いことだし、「アトライター」を体験することでその興味がふくらみ、さらに先へと続いていこうとすることを想像すると、もっと書いてみて欲しいと願わずにはいられません。

選考に参加してまず感じたのは、高校生の方々にとって『アート』は心の傷口のすぐ近くにあるらしい、という印象でした。自分の負の体験の記憶と響きあうような『アート』作品にひきつけられたり、抱えている負の体験をプラスに転化するための切実な手段として『アート』を考える、というテーマがいくつも提出されていたからです。

確かに、『アート』にはそうした深

いヒーリングの力があって、だからこそ、大学受験に直接役に立たない場合でも、本当の意味で大切な役割を果たすことができるのだらうと思います。これと似た役割を果たせるものは、それほど多くないのだらうか、というより、『アート』はヒーリングの力をさらに期待されているのかもしれない、とも考えました。

応募作品を読むと、自分の体験したことを通して『アート』を理解しようとする方が多いようですが、『アート』に未知のものとの出会いをもっともって見つけてほしいとも思いました。なんだかわからないけれどなんだろう、と興味が開かれていくような、知らないもの、わからないものへのインターフェイスとしての『アート』もあるはずだからです。

大賞受賞の3名の方たちは、いずれも一気に読ませる文章でした。

安西さんは、自分が本当に制作したいものを求め自問するうちに、心の閉ざしていた部分を開く決意へと向かっていく展開を、力のある文体で描きだしています。『アート』をヒーリングではなく問題解決のツールとしてとらえようとする彼女の姿勢に共感しました。

上田さんは、『アート』作品との出会いの体験を自分の言葉で言い表すことから始めて、「作品探求」の王道ともいえるような分析を行いました。彼女の思考は作品のなかで自分を動かし

た力は何なのかを突きとめようとしません。文章力、表現力ともにすぐれていて、社会と生命の関係にまで発展させた結語も見事でした。

高橋さんは、制作の楽しさをヴィジュアルに書ききっていました。素材や技術的な工夫の具体的なディテールがリアルに描写され、どんな作品が出来上がったのか、ぜひ見てみたいという気持ちになります。

特別賞の須長さんは、自分が制作を通じて得た『アート』の力を中学生にも伝えたいという目的を持って美術展を企画、立ち上げたそうです。その動機を書き表すなかに、『アート』の力への信頼が伝わってきました。これは「芸術支援」の分野に入る作品ですが、この分野の応募数が少なく、今後はもう少し関心が集まってほしいと思います。

最後に『アート』という題材について触れておきます。応募作品においては絵画を扱ったものが圧倒的に多かったのが少し気になりました。最も身近な『アート』の代表が絵画であることは間違いありませんが、絵画や彫刻に限定しなくてもいいはずで、もう少しこれを広げてとらえて、映像や建築やファッションや、これも『アート』かもしれないぞという提案を含んだ意外なものについても、「アトライター」になって書いてみてはいかがでしょうか。

(みつだ ゆり)



## 第2回高校生アトライター大賞選評

齊藤泰嘉

第2回高校生アトライター大賞選考委員  
筑波大学大学院人間総合科学研究科教授

美術も好きだが、文学も好きだ！絵をかくことも好きだが、文をかくことも好きだ！そうした欲張りな高校生は意外と多いようだ。アトライター大賞への今年の応募者数は200人を超えた。そのような芸術系欲張り族が才能を発揮できるのが、アート・ライティングだと思う。

かくいう私も高校生の頃は、美術も好きで文学も好きだった。それだけに大学受験では、美術系にするか、文学系にするかで迷った。結局、文学部に進学し、美学美術史という専攻を選んだ。文学も美術も両方学びたいという欲張りな気持ちをかなえてくれる専攻だと思ったからである。大学を出てから美術館学芸員となり、やがて大学に移って今に至っている。大学では芸術支援学を教え、今年から「アート・ライティング論」という新設科目の担当者の一人となり、学生と一緒に美術エッセイや美術批評文を読んだり書いたりして、美術と文学の両方にまたがる領域を探索して楽しんでいる。

今回、そのような芸術系欲張り族の一員として審査に参加し、海外を含む全国高校生からの全214編の応募作を読ませていただいた。すべてを読み通すには時間もかかり、疲れもしたが、高校生らしい新鮮な感性の文章に出会い、嬉しかった。優秀候補作品27点から選ばれた大賞3点（順不同）は、安西陽香「全てが嘘っぽい」（芸術総合高校、埼玉県）、上田千尋「水玉 Impact」（立命館慶祥高校、北海道）、

高橋和加奈「そうきち 十歳」（札幌平岸高校、北海道）である。また、特別賞が、須永夏子「中学生対象の美術展を企画して」である。

安西陽香の作品は、日本画の授業で描いた紫陽花の絵に「物足りなさ」を感じる自分の気持ちと、そうした状況からの脱出の予兆を書いている。「嘘っぽい」絵だという周囲の批評も冷静に受け止めて自己分析している。自分を「誰も守ってくれない」状況になってしまった家庭の変化。そのことにより「心に蓋をした」自分、絵に思いをこめることができずに空虚な絵しかかけない今の心境などを淡々と書いている。最後は、「今度は私が、同じように大切なものを失って悲しみを抱える人の支えになるような絵を描きたい」と結んでいる。前半は、つらい状況に負けそうになる自分の分析、後半は、わずかながらも、前向きな気持ちの自然な盛り上がり表現である。最後でほっとさせてくれて、読者も救われる。

上田千尋の作品は、札幌芸術の森美術館で出会った草間彌生の作品（無限に増殖する水玉の世界）から生まれた感動や発見を素直に綴っている。「飛び込む」、「吸い込まれる」などの身体感覚的表現、あるいは、「小さな存在がたくさん集まることで、この無限の世界を美しく形作っている」という宇宙論的発想に高校生らしい心身のダイナミズムがある。

高橋和加奈の作品は、10年も一緒にいる愛犬そうきちの姿を彫刻に



し、展覧会に出品した制作体験記である。そうきちの母犬のサクラが死んで8年、あれほど一緒にいたサクラの姿が思い出せない筆者は、そうきちの姿を彫刻でつくることに決め、それをやり遂げる。彫刻を選んだきっかけは、札幌芸術の森美術館で野外彫刻を見て「この道を行ったらどんな作品に会えるんだろうとワクワクしながら友達と走り抜けたあの感じ」が大好きだったからである。「『そうきち十歳』が全道大会から帰ってきたら、『お帰り』と言って玄関においてやろうと思います。そしたら毎朝二匹で首をかしげながら見送ってくれる気がするのです。二匹でいたあの頃みたいに」と筆者は結んでいる。彫刻制作の体験を丁寧に綴ることにより、彫刻というアートの本質に触れることのできたライティングとして心に残る。

（さいとう やすよし）

## 大賞

## 全てが嘘っぽい

安西陽香

埼玉県 芸術総合高等学校

きれいな絵だねと、友達は言うけど。  
きれいな絵が描きたいわけではなかった。  
芸術総合高校の美術科に入学してから、一年と半年。

日本画の授業で描いた紫陽花の絵を見て、物足りなさを感じた。

真っ暗な画面のふちに沿うようにして、豪華な紫陽花が咲き誇っている。その中には線描で描いた紫陽花が闇に溶け込むように咲き、中央から少し離れたところに、二つの赤い紫陽花が支えあうようにして花を咲かせている。

何が足りないか分からない。

描きたかったものを尋ねられた。

「時」をテーマに書きたかったけど、私は「生と死」だと答えた。

いつも本心を隠してしまう。

なんか、全てが嘘っぽいね、と何人にも言われた。

小学生からの、自身に起こったことを偶然そこにいて参加しただけというフリをする癖。

小学校高学年の頃、私はお母さんとお父さん、お祖母ちゃんと猫二匹の四人と二匹の家

族だった。お母さんは少し厳しいけど明るい性格で、お父さんはそんなお母さんに頭が上がりません。お祖母ちゃんは私が散歩に付いていってもいいかと聞くと、いつも大喜びした。

私が一人っ子だったということもあって、皆優しくて、甘やしてくれた。

でも、お祖母ちゃんが亡くなったことをきっかけに、幸せな家族の歯車が狂っていった。

誰も守ってくれないと気付いたから、心に蓋をしたのだろう。

そうしないと、きっと私は耐えられなかった。

絵だって一番描きたいものを描いて、否定されるのが怖い。描きたかった自分そのものを否定された気がする。

絵を描くことで思い出してしまうなら、いつそやめてしまえばよかった。

だけど絵を描くことが好きだったから止められなくて、当たり障りのない絵を描くようになった。

でも、本当は、私は悲しみや苦しさを共有してもらえるような絵を描きたい。

同情してほしくはなくて、ああ苦しかったんだねと、悲しいと感じた自分を認めてもらいたい。

そのためにも、作家が文章の漢字一つにまでこだわるように丁寧に、絵の中に少しずつ想いを込めようと思う。

絵を見た人に、一緒に悲しんで、一緒に寂しさを感じてほしいと思うのは我儘だ。でも、誰かにその絵を認めてもらえたら、私はそれで一人じゃないと思える。

だから、つらくても忘れてはいけないうららう。

お祖母ちゃんの部屋の、日を浴びて乾いた畳の匂い。お父さんの大きくて温かい手のひらの熱。猫の毛の、土臭いけど柔らかい感触。階段下から私を呼ぶ、優しいお母さんの声。

もうどこにも無いけれど、私の中に残る私だけの記憶。

次描くときは、絵にこんな自分の体験を少しでもいれたい。悲しいとか、嬉しいとか、実体験からの想い。

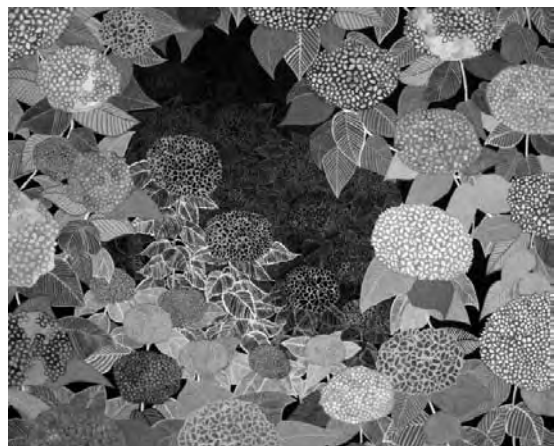
紫陽花の絵も、懐かしい記憶を思い出すの

がつらくて、自分が紫陽花に対して持っている想いを考えなかった。お祖母ちゃんと散歩したときに見た、紫陽花に張られた蜘蛛の巣は綺麗だったとか、そんな思い入れを何も考えずにただ紫陽花の淡い色に惹かれて描いた。思い出したくない記憶に蓋をして描く絵は安全だけど、自分の気持ちが入っていないから、空虚だ。

まだ正直、あの頃を思い出すのはつらい。

でも、いつか思い出しても泣かなくなったら、今度は私が、同じように大切なものを失って悲しみを抱える人の支えになるような絵を描きたい。

(あんざい はるか)



安西陽香 《夏には枯れる》2007年 岩絵の具・和紙 80.3×100.0cm

上田千尋

北海道 立命館慶祥高等学校

「衝撃」—まさにその時の感情を表すには、「衝撃」という言葉が相応しい。北海道芸術の森美術館の広大な、そして緑あふれる敷地内に足を踏み入れた途端、草間彌生『水玉強迫』の作品の一部であるオブジェが目飛び込んでくる。それは何とも言えぬ曲線を描いた、赤と白の水玉の物体。それを見てしまった瞬間に、物体自身が、派生し、増殖し、一面の緑を覆ってしまうのではないのだろうか、と思わせるほど、水玉の存在はその場に不自然で奇妙であった。

「クサマトリックス」と題された草間彌生の世界、そして私が最も目を奪われた『水玉強迫』という名の赤と白のオブジェ。それは私にとって、異世界に飛び込んだような、または投げ出されたような、そして、吸い込まれる、巻き込まれる、逃げ出したい、そんな恐怖心を持つ作品であった。それと同時に、なんとも気だるくメランコリックな印象と、理由の解らないどうしようもない焦りが、私を襲った。「マトリックス」とは母胎・基盤・発生源を意味するが、彼女が作り出す世界観と生み出す作品たちは、母胎・基盤・発生源、つまり「マトリックス」そのものであると、私は感じる。どこまでも続く、終わる事を、そして留まる

ことを知らない赤と白は、一度目に焼き付けられれば絶対に離れてはくれない。しかしそれは、もう一度「見なくてはいけない」という、欲求と衝動に駆られる一種の麻薬なのである。

「草間彌生とは一体、何者なのだ。」滾々と湧き出る泉のように、止まらぬ感情は生まれ、あふれ出る。私は草間彌生と水玉に呑まれたのだ。

長野県松本市に生まれた草間彌生は、少女時代より、統合失調症を病み、繰り返し襲う幻聴や幻覚に苦しめられている。統合失調症とは、思考、知覚、自我意識、意志・欲望、感情など、多彩な精神機能の障害が見られる精神疾患の一つであり、発病率は全人口の1%程で、決して珍しい病気ではない。草間彌生のシンボルとも言える水玉が生まれたのは、その幻聴や幻覚から逃れるため、それらを書き留める絵を描き始めたことにあつた。画面のみならず、見るものの視界を覆いつくさんばかりに、際限なく増殖する水玉のモチーフは、彼女のトレードマークとして、世界的に有名である。

彼女は常に「生と死への問いかけ」を、作品を表現する際のテーマとして使用しているが、『水玉強迫』はまさしく生と死を深く考え

させられる、イメージーションの塊だ。この作品について、「『水玉の強迫』が常同反復作用として、限らない目眩を呼びよせてくる。」※)と草間彌生は言う。私はその言葉に対し、なぜ幻聴や幻覚から生み出された絵が「水玉」だったのであろうか、という疑問を持つ。しかし、幻聴や幻覚の狭間に見た「水玉」こそが、その問いかけへの答えを導く、ひとつの鍵であるのだろう。

私が水玉から感じられる印象は、一面にドットが散りばめられ、留まること知らない「侵食」や「拡がり」、そして「恐怖」である。それが作品の中では、ドット一つ一つを「無限の魂」として象徴し、力強い生命力が襲ってくる恐怖として表現されたのではないだろうか。つまり、少女時代に草間彌生が見たのは、私たち人間のどこまでも続く「生命の光」がみなぎっている様なのだ。私が初見の際に感じた気だるさやメランコリーは、目眩を起こすほどの生命力を表したオブジェの一部として、自身が取り込まれるのを身体で感じたからであると考えてる。

『水玉強迫』のどこまでも続く水玉は無限で、留まることなく駆け巡る。そして私の頭中の全てを覆い、拡がり、離さない。それは

草間彌生が今まで目にし、作り出して来た、永遠で終わる事を知らない世界であるはずなのだ。しかし私は、そこは限られた空間であり、自分だけの意識しか存在しないのではないのだろうか、という奇妙で不思議な錯覚に陥る。その不思議な錯覚の世界に引き込まれ、私はどこまでも続く水玉の一部となつてこう感じた。

無限の広がりを見せる、無数の水玉。つまり、広くて灰色の社会という現実が存在する、一つ一つの生命の光は、儂くもろい。それ自身にどんな意義があり、どんな価値があるのか、常に答えを求めて彷徨っている。しかし一つの魂の存在は果てなく小さいが、その小さな存在がたくさん集まることで、この無限の世界を美しく形作っているのだ。そう考えると、小さくとも頼りなくとも、存在する魂に意味のないものなど、無いのである。そして魂は、目眩を覚えるような生命力で侵食し、私に「衝撃」を与えるのだ。

(うえだ ちひろ)

※六本木ヒルズ「クサマトリックス」ホームページ (<http://www.roppongihills.com/jp/feature/mami8cj8i0000013qs.html>) 草間彌生メッセージより引用

## 高橋和加奈

北海道 札幌平岸高等学校

私は二匹の北海道犬を飼っていました。母犬のサクラと末っ子のそうきち。弟妹より一緒にいる期間が長く、いつも困ったような顔で私の後をついてきました。サクラが死んで、もう八年になります。あんなに一緒にいたのに、あの姿も、あの笑った顔も、あの鳴き声も、あの毛の柔らかさも、もうボンヤリとしか思ひ出せません。私はこんな風にいつかは、そうきちさえも忘れてしまうのでしょうか。そうきちは今年で十歳になりました。お別れの時が近付いているのです。

『そうきち十歳』を初めての高等学校文化連盟（高文連）の展覧会に出品しました。色とりどりの作品が多いなか、素朴な色合いのお座りした犬は、そこだけ時間が止まっているように見えました。

始めから、そうきちを作りたいと思っていました。油絵でも水彩画でもデザインでも何でも良かったのです。彫刻にしようと思ったきっかけは、学校の授業で行った札幌芸術の森・野外美術館での個性豊かな彫刻たちでした。触ってみて、凸凹してたり、つるつるしてたり、丸かったり、三角だったり、棒だったり、こうしなきゃいけないとかそんな決まりなんて一切なくて自由でした。この道を行ったらどんな作品に出会えるんだろうとワクワクしながら友達と走り抜けたあの感じが大好きでした。

私の作品作りは無計画で、いつも作りながら次に何をすべきか決めていました。

始めは紙粘土で、お座りしているそのままのそうきちを作る予定でした。お座りしている姿をいろいろな角度から写真を撮り、大きさも計りました。学校にある木材で骨組みを作り、それにくしゃくしゃにした新聞を巻きつけていきました。そうすることによって紙粘土を使う量を必要最低限におさえられるんだよってお母さんが教えてくれました。家にあった新聞紙をすべて使い、巻いては麻ひもで縛り、崩れてはハリガネで固定しました。上手に出来なくては癩癩を起こし、途中まで出来ていたものを壊してしまったり、悔し泣きしたり、疲れて作業中に寝てしまったこともありました。普段何となく見えても全然観察出来ていなかった、見たつもりになっていただけなんだと気が付きました。新聞紙で大体の形が出来た頃にはもう夏休みに入っていました。

新聞紙で作った割にはなかなか上手に出来たと思いました。くしゃくしゃになった新聞紙と麻ひもの懐かしい感じが好きで、このまま出品してしまおうと思いましたが、先生に却下されました。でも、この雰囲気を生かしたいと思いました。なので紙粘土を貼付けるのをやめて、半紙を貼り付けてみました。自分の中で何か違うと感じ、どうしたら良いのか悩みました。私が作りたいものは何なのか、見ためだけ似てれば良いのか。そして、やっとなら私が作りたいのはそうきちの外側ではなく内側なのだと気が付きました。でもどうやっ

て？私は悩みました。温かくて、素朴で、身近にあるもの…悩んで悩んでどうしようもなくなった時、お母さんが「麻布！」と言って庭で使っている麻布を持ってきてくれました。目から鱗が百枚落ちました。こんな身近にこんな良い物があったなんて。次の日、朝早くから学校に行き、麻布を裁ち鋏で小さく切り二重に貼っていきました。一枚一枚貼り付けていくたび、思いでが一つ一つ頭に浮かんで消え浮かんで消えました。友達の一人に思い出話をすると友達と一緒に泣いてくれました。温かい気持ちになりました。

首輪は買う予定でした。鼻と目はボタンで付ける予定でした。でも、やってみただけで自分が納得できるものではありませんでした。なので、麻ひもを棒で編んで首輪を作り、麻ひもを指編みし鼻を作りました。それからアクリルの絵の具で色を作り、染めました。何度か失敗しながら、やっと気に入る物が出来たのは高文連の前日でした。目はつけると説明しすぎる気がしてつけませんでした。

作品を乗せる台は大きくて私一人では作れません、お父さんが手伝ってくれたというよりも、私が少し手伝ったという感じでした。お母さんは木目の書き方を教えてくれました。「台も作品」と言ってスポンジを使って描きました。

出来上がった作品は、困ったように首をかしげて目も見えます。目がないのにそんな感じがします。中身が新聞紙なので細かい形

は正確ではありません。少し太り気味な気もします。でも、それは私の作りたかったそうきちそのものでした。新聞紙で形を作ったときの素朴な雰囲気はそのままで、芸術の森で感じた自由さ、そうきちが持っている優しさ

と忠実さ、すべてを詰め込んだ気がしました。『そうきち十歳』が全道大会から帰ってきたら、「お帰り」と言って玄関においてやろうと思います。そしたら毎朝二匹で首をかしげながら見送ってくれる気がするのです。二匹でいたあの頃みたいに。

(たかはし わかな)



高橋和加奈 《そうきち十歳》 2007年 麻布・麻ひも・木・新聞紙・針金・絵の具 70×100×110cm

## 特別賞

# 中学生対象の美術展を企画して

須永夏子

埼玉県 大宮光陵高等学校

中学生の頃の私は美術の中から生まれる深い感動を知らなかった。高校で美術を学ぶ内、自ら構想し絵を描くこと、創作する苦悩と快楽を知った。作品を創作する為には何かに突き動かされなければ作ることはできない。感動や情熱、他者に伝えたい思いが作品として形になる。全ての作品には思いが詰め込まれ、私達の心へ浸透し、感情を豊かなものにしてくれる。そして自分のこと、自分の見てきたものを表現できること。美術から自分を見つめる素晴しさがあることに気づき、感動した。自分という人間に戸惑っていた中学生の頃の私へ教えてあげたい。そんな想いに突き動かされ、仲間達と「第一回中学生光陵美術展」を企画したのだった。

高校生だけで運営するこの企画は、美術から自分を見つめることを中学生に伝えようとした試みであった。「好きな自分」をテーマとして、A4サイズの紙に、自由な方法と描画材料で「自分」を描いてもらう試みだ。自分

について深く考え、自分を好きになる切っ掛けになればという願いから。近年、いじめが原因となって自殺をする中学生達が多いことなどは、大変心苦しい問題だった。おそらくそのような中学生達は、自分を深く見つめる手段を知らず、また他人と自分の違いを認めることが困難で、どうしようもない気持ちに追いやられているのではと思われる。自分が好きかという問いに、彼らは首を傾げてしまうのではないだろうか。

企画の段階で最も意見を交わし合ったことは、賞をつけるかどうかということだ。賞を目指してたくさんの応募が欲しいという思いの反面、それは優劣をつけることにならないか？多くの中学生に参加してもらうために必要だ。と賛否両論の中、結局、表現を競う為の企画ではないという観点で賞はつけないことに落ち着いた。それぞれの作品に高校生がコメントを書き、提示し、展示発表の当日、共に絵の好きな高校生と中学生が交流の場をもち、自分や絵について語り合うといった形式の展覧会として企画をまとめた。募集期間が短かったにも拘らず、50通近くの応募をいただいた。中学生の作品は想像以上に興味深いものであり、鉛筆・パステル・ペン・クレヨン・色紙と、描画材料も様々だった。笑った自分が好き、犬を好きな自分が好き、絵を描く自分が好き。一枚一枚の絵にコメントを添えていると、彼らの「自分」と会話を交わ





しているようだった。自画像でなく魚を描いた作品や、玉ネギのような人間を描いた作品など、ユニークな表現も数多くあった。幼児が好き勝手に描くのと違って、中学生特有の複雑な感情を試行錯誤し「私」として絵に刷り込み、瞬間見ただけでは読み取れない深い情報を我々に伝えていた。自分が好きだと伝えてくれる絵を見ると、こちらまで自分への愛情が湧きあがる。絵とはそれに接する人の心にも響かせる素晴らしいものだと再度、実感させられた。

展覧会当日は出品した中学生と交流の機会を持った。絵を描いた中学生の想いを知り、それに高校生が感じた率直な想いを述べて重ねていった。すると一枚の絵からいくつもの繋がりが生まれてくるようだ。「他の人の絵を見てどうですか？」と私が訪ねると「絵って自由なものですね」とその出品者の女の子は笑って答えた。他者の自分を知ることで、改めて自分の存在に気付くことができるのだ。中学生達の絵は似通いもしない各々の個性が突出していた。人と人が絵を通して繋がる展覧会は成功だった。

展覧会には中学生の他にも多くの人が鑑賞されていった。30代の女性がこの企画の意図を知り「大人がいじめ問題について考えるとカウンセラーしか思い浮かばないのよ、美術で自信を持たせるなんて驚いたわ」と共感の言葉もいただいた。少し前、私は中学生で



あったから、この企画を思いついたのかも知れない。しかし、それよりも私が美術を学び、絵を描くことをしていなかったら美術の力にずっと気付かないままだった。

自分を見つめる手段として、私は美術の力をかりた。この展覧会でも多くの中学生が自分を好きになってくれたと思う。絵を通して自分を好きになった人が、さらに別の誰かの存在を認め、気持ちの繋がりが広がっていったら素敵なことだと思う。初めての企画で不備な点もたくさんあった。しかし得るものはとても大きなものだった。

今回「第一回」と名付けたのは、この展覧会が回を重ねるごとにより交流の形を広げ、成長していくことを期待してのことだ。後輩たちの熱い想いが、さらに美術の交流を深めてくれることを信じている。

(すなが なつこ)

和泉孝広

東京都 筑波大学附属駒場高等学校

すこしまえのこと、僕は、ちょっとした理由から、部屋を掃除することにした。掃除といっても、これほど大がかりな掃除をするのは、久しぶりである。僕の部屋は、とんでもなく散らかっている。本棚にはマンガばかり入っており、勉強道具は、ほとんど床に積まれている。そして、机の下には幼稚園の頃のバッグが、いまだに落ちている。ひどいものである。先ほど、ちょっとした理由と言ったが、ほんとにちょっとした理由なので、ここでは述べるまでもない。ただ、高校生になってから教科書やら本やらで手狭になった部屋を、一新しようと思ったのである。

いらぬ物を整理しているうちに、見覚えのない段ボール箱が一つ、奥のほうから出てきた。持ち上げてみるとずっしりと重い。明るいところでよく見ると、かなり黒茶けている。興味にそそられて、開けてみた。すると、小学校の頃のノートが何冊も入っていた。一番上の一つをひらいてみると、汚い字で同じ漢字が何行にもわたって書かれている。懐古の情にかられた僕は、しばらくページをめ

くっていたが、ノートの半分もいかないうちに、漢字練習は終わりを告げ、あとは白紙のページが残るのみだった。僕は、ノートの残りを、計算用紙に使おうかと思った。しかし、紙には困っていなかった。そこで、どうしようかと悩んだあげく、すべて捨てることにした。ノートをすべて出し終えると、まだダンボール箱の底に、茶色い封筒があるのに気付いた。手にとってみると、紙のようなものが、折りたたまれているのがわかる。出してみると、そこには、公園の絵が描かれていた。ブランコの周りに、木が生い茂っている。そして、その上を鳥たちが飛んでいる。よく見ると、その色は赤だったり、ピンクだったり、とてもカラフルである。一瞬、これが何なのか分からなかった。しかし、次の瞬間、右下のほうに書かれている名前とともに、それが小学校の頃に、自分が描いたものである、と気づいた。

僕は小学校二年生だった。今ではその頃の記憶はほとんどない。しかし、この絵を描いた時のことは、鮮明に覚えている。図工の時

間だった。近くの公園に絵を描きに行く、という授業だったと思う。何を描こうか迷っているうちに、あっという間に時間は過ぎていった。友達がみな描き終えているのに、僕はひとり、何も描けずにいた。描きあぐねている僕に、先生は、「見えないものを、想像して、描きなさい」と言った。そこで僕は、見慣れたブランコの上に、見たことのないきれいな色の鳥たちを描いた。次の授業の時、僕は先生にとっても良く褒められた。なぜ褒められたのか、その時は、よくわからなかった。しかし、それ以来、僕は絵というものに興味を持つようになった。

今になり、あらためてその絵を見てみると、褒められた理由がなんとなくわかる気がする。先生は、子どもの時期にしか見えないもの、感じられないことを描け、と言いたかったのかもしれない。そこで、ふと思った。今、僕にそのようなものが描けるだろうか。おそらく、ピンク色の鳥なんて、描けないだろう。なぜなら、そんなモノは存在しないから。というより、存在しないと、頭の中で、決めつ

けてしまっているから。しかし、子どもの頃の僕にとって、それを描くには、何の苦勞もいらなかった。思えば、高校生になった僕たちは、いろんな面で、思考の枠組みができて始めているのかもしれない。それは、だんだんと大人という領域に、足を踏み入れているということの意味している。もちろん、それ自体は決して残念なことではないと思う。しかし、子どもの頃感じた何か貴重なものも、一緒に忘れようとしている。多分それは、大人になるにつれて、全く意味を成さなくなり、冷たく、無駄として、切り捨てられてしまう場合が多いだろう。おそらくこの絵を見つかなかつたら、僕も、古いノートとともに、子ども時代の何か、を捨て去っていたのかもしれない。

僕は、その絵を段ボール箱へそっと戻した。

(いずみ たかひろ)

岡崎瀬波

ニュージーランド Cashmere High School

中学生時代の記憶を手繰れば、あの無彩色の日々がまず、鮮明によみがえる。

画材の、鼻に沁みるにおいが満ちた美術室と、軋む木の椅子を意味もなく傾けながら、室内の片隅で鉛筆を指に持て余している14歳の私。

酸素の薄い空気に漂うような、日々、やるべきこととやりたいことと、やらなければいけないことの矛盾の中で、少しずつ自分の中の何かが大人になってゆくのを感じていた。まるで幼かった子どもが脳裏で展開する、“描かなければいけない絵”の構想は、浮かび上がっては消え、ただただ自分の中に生まれていた生温い虚無感を加速させる。

豊かな世界を自由に描く、という課題を先生の口から初めて聞いた時から、イメージは死んでいたも同然だった。

豊かという単語から連想される世界はあまりにありきたりな、定型的な絵にしかなれそうにない。豊かな世界という概念が、私には無かったのだろう。描けないものを描こうとする矛盾と、描かなければいけない義務とのジレンマは、ただ苦しかった。

汚れ一つ残せない画用紙の上で、そして放課後の眩しい陽の光が鮮やかなオレンジ色に変わり、そして影となり無光になってゆく日が、幾日か続いた。

豊かな世界という言葉に、貧相な見せかけの想像さえも、尽き始めていた。

課題の提出日前日まで、白の画用紙は彩り

の欠片も持てなかった。

本来私は絵を描くのが、どうしてもなく好きな子どもだったと、それは大量に保存された藁半紙の落書きが証明している。

昔から、感情の起伏を感じたのなら、まず絵を描いた。水彩絵具を水に溶かしながら、具像性のない色の交わりを描くのも好きだったし、色鉛筆を持って、咲きはじめた季節の花を模写するのも、楽しくて仕方がなかった。自分の中にあるものを、目に見えるかたちにするという、この単純な作業が持つ果てのない可能性の様なものに、きっと救われ続けていたのだろうと今になって思う。

絵が描けないという状況を初めて体験したのだろう、故に行き場のないもどかしさが針となり、柔らかく無防備な身体を中心に刺さるような感覚に、涙が出そうだった。

揺れる電車の中、向かい合わせの人の顔、どこかから鼓膜をふるわせてくる、かすかな子どもの泣き声さえ俄かに気になるような、言葉のない通学路。

描けない自己嫌悪と、生まれはじめた諦めとが煮詰まるには十分な時間も過ぎ、この課題が終わらなかつたら、絵を描くのをやめるのかもしれないと、虚ろな頭でぼんやり、他人事のように考えていた。

走り抜ける車窓の外の景色は、その瞬間も、眩暈のするくらいに凜とした、夏の緑色をしている。

当り前に始まり、終わる一日からすりぬけるようにして、美術室のドアを開く自分の手が、心持ち冷たく感じたのは、偽りではなかったと思う。

九つ並ぶ、絵具まみれの机から、その日も一番隅の席にまっすぐ向かった。

窓が隣にあるせいか、陽に焼けたその机だけはいつも、どこか特別なにおいがした。

時間が過ぎても、画用紙は取り出さなかった。

画用紙のある強迫感を排除して、“豊かな世界”だけに集中しようと、手練り寄せた希望に賭けてみた。

血潮の流れさえ聴こえるくらい純粋に耳を澄ました。

夢を見る時よりも静かに目を閉じた。

ただただ思い描き始めたのは、この身体が生きている世界のことだった。

呼吸をして、水を飲んで、ふとした瞬間に見上げる空の蒼さだとか、足で昔踏んだ土の柔らかさ。家族や友人や、大切な人のいる街。私が見てきた彩。

豊かな世界を新たに考えるのは、そこで止めた。

思い出すように、気が付きはじめたのだ。ただ絵を描いて、幸せを感じていたり、意味もなく溜息を零したり、これ以上の豊かさなんて、果たしてあるのだろうか。

全身に、ずっと温水が満ちてゆくような心地よさが、それからはあった。

まっさらの画用紙の隣にパレットを置き、

チューブから練り出した7つの極彩色は指で取った。

渦を巻くような流れで、まず青を塗った。真昼のまぶしい空の色。

黄色のラインを画用紙全体、縦に引いてゆくと、指紋の模様でそれは掠れてゆく。幸せは世界にあふれている。

小さな赤い花には燈色の蝶々が棲む。青紫のワンピースで、幼い頃に走り回ったひろい公園の世界。閃光のように脳裏を走る思い出。母がいて、野良いぬがいて、私は何もかもと友達になれた。

指から伝わり私の持つ全てで感じる、それは間違いなく、歓びだった。幸せで、嬉しくて、仕方がなかった。

柔らかくなった陽の光と対照的に、窓ガラスの先では、月がやおら笑うように街と世界を照らし始めていた。

学校の閉まる間際、最後に、緑を描いた。降り注ぐ世界の緑は何よりも、さきはう世界の豊かさを象徴していると信じていた。

目を開けて見る夢の中に、いた。

こんなにもあふれる彩りを信じれば信じるほど、こうして確かに呼吸する世界は、限りなく豊かな世界へとなりえたのだ。

(おかざき せな)

岡島 望

北海道 立命館慶祥高等学校

ぐにゃりと曲がった時計。異常に足が長い、人間らしき物体。おおざっぱな風景に細かい雑貨。唇型ソファー。美術とはこんなにも衝撃的なものだったのだろうか？それが私が一番最初にサルバドール・ダリの絵画に出会った時の気持ちだ。私たちが普段考える美術。美術と聞いて殆どの人が想像するものは『絵』だろう。どこかの田舎が描かれた水彩画。幼いころは何故か怖かった音楽室にあるベートーベンのような肖像画。美術、と聞けばどうしても平面的なイメージをしてはいないだろうか？私も彼の絵・・・否、ダリの美術に出会うまではそういう考え方をしていた。

ダリの美術はダリ自身が編み出したダブル・イメージでより深い彼の世界を表している。ダブル・イメージとは一見してみるとただの部屋の絵なのだが、ちょっと焦点をずらすことで人の顔が浮かび上がってくる・・・このような簡単に言えば一つのもが見方を変えると別のものに見えるというものだ。このダブル・イメージと似たような話を最近私は学んだことがある。それは『二つの立場に立って考える』、ということなのだが、地球市民と

いう学校の科目で学んだ。例えば環境問題について例をあげるとしよう。森林伐採の主な原因として発展途上国の人々の過剰な焼畑ということの一つ挙げることができる。では彼らに焼畑をやめろ、と言うとする。しかし、彼らは焼畑によって食料をえて、毎日を生き延びることができるのだ。焼畑は環境に悪い、やめろ。確かに彼らもその意見には納得できるだろうが、それでは彼らの生活をどうしろというのだ？という疑問が残る。さらに言えば先進国に住む私たちの木材使用率だって彼らの焼畑に負けず劣らず環境破壊の原因なのだ。どちらか一方の意見だけでお互いが納得することは、まずない。ダリのダブル・イメージを知ったとき私は思わず叫びそうになったのだ。ダリは、美術を使って早い段階でこの考え方を世界に示していた。

額の中に納まっている物＝美術、という考えは間違っている。美術から語りかけられるものは人に莫大な衝撃をあたえるし、今こうやってパソコンを使って文字を打っているわけだがマウスのデザイン1つとっても美術である。家のカーテンを買うとき、いったい自

分が何を思ってそのカーテンを選んだか考えてみた。色？デザイン？深く考えてはいないが自分でも知らない間に、気に入るカーテンと気に入らないカーテンの二種類にわけている。そして、気に入ったカーテンを買うのだ。しかし、私が気に入ったからといってそのカーテンをすべての人が気に入るわけではない。「その色はいやだ。」という人もいれば「そのデザインはおかしいだろう。」と言う人もいる。

ダリの絵を見てから、私はもう一度自分の周りをよく見回してみた。私たちが思っていないだけで、実は思いのほか身の回りに美術があるのだ。空も、ビルも、マンホールの柄や日用品も・・・美術館にある物だけでは決してない。暖かいイメージを暖色から感じるのはどうしてだろう？寒いイメージを寒色から感じるのはどうしてだろう？人は自らがまったく知らない間に美術に心に入り込まれ、しらぬ間に美術を通して生活をおくっている。ダリしかり、ゴッホしかりピカソしかり。彼らは確かに偉大な芸術家だが、私にしてみれば、私も、いや、人類全てが芸術家といってもいいだろうと思う。人は皆心に芸術の心を

持っているのだ。しかし、それを知らない、美術を、芸術を遠くの存在と思って生活している。なんてもったいない！ダリの美術はまさにそれを訴えている。思想的にも、視覚的にも。彼は私の芸術の心をたたき起こしてくれた芸術の恩人だ。こんなにも世界が芸術にあふれた、楽しいところだなんて今まで気づかなかった。何気ない通学路が、学校が、日常がこんなにもカラフルに見える。

彼の美術で訴えていることを考えれば、ひょっとすると彼のかの有名な口ひげもファッションブルで多少お茶目なイメージを与える物と、芸術家としての天才的要素を表す物としての二面性をもつ彼の策略なのかもしれない。

(おかじま のぞみ)

参考文献 「ダリ展 創造する多面体」リーフレット（北海道立近代美術館 2007年）

小野山 梢

北海道 札幌平岸高等学校

9月のある日、私はクラスの友人数名とともに市内の老人ホームを訪れた。何のためかという、そこのお祭りのイベントとして、お爺さんお婆さんの似顔絵を描くためである。友人に頼まれてうっかり安請け合いしたが、これがかなり大変な経験であった。

老人ホームに辿り着いてすぐ、私達は30名近くの老人達の中に放り出された。似顔絵を描くためのテーブルや特設スペースなんて無い。しかも老人達は、殆どの方が食事や催し物を楽しんでいて、私たちの方を向いてくれない。スタッフの方は助けてくれたが、基本は自分達でこの老人達に話しかけ、似顔絵を描かせてもらう。そんな状況になっていたのである。私達は最初、自分から話しかけることに戸惑い、しばらくぼうっと立っていた。

しかしそんなことをしていても何も始まらない。勇気を出して一人のお婆さんに声をかけた。最初の似顔絵は、緊張でいっぱいだった。シャープペンを持つ手の動きは固く、何度も消しゴムを使って描きなおし、お婆さんとも殆ど会話できずにいる間に描き終えた。そして私はおっかなびっくり、ドキドキしながら相手に完成した似顔絵を見せる。今まで

似顔絵を描いて相手にあげたことなんて一度も無いのだから反応が怖くてしかたなかった。でも、わたしの緊張とは裏腹にお婆さんは照れくさそうに笑って「ありがとう、悪いねえ」と言ってくれた。その声はすごくすごく優しくて私を本当に幸せにしてくれたのである。

そこから、単純な私は調子に乗り始める。祭りを楽しんでいる老人達に、恥ずかしがりながらもじわりじわりと近づいていった。描いている間話しかけてくれる陽気なお婆さん、黙って恥ずかしがっているお爺さん、老人達は一人一人とても個性豊かで描いている私をワクワクさせてくれた。なんと言っても、普段はキャンバスと1対1で戦っている制作と違って、描く対象とのコミュニケーションが取れることが幸せだった。

下絵を描き終え、色を塗り、名前を入れる。この作業が全部終わったのは午前11時前から4時間以上も経った15時である。だが、時間が経つのは本当にあっという間だった。30枚近くも描いたので時間がいっぱいいっぱいであったのもあるが、それ以上に老人たちとふれあいながら似顔絵を描くという作業が楽しかったからだと私は思う。



出来上がった似顔絵を一枚ずつわたしていくと、お爺さんもお婆さんも皆とても喜んでくれた。描く時には照れくさそうにしていた人も、描かなくていいよとはじめは首を横に振った人も、渡した後にはにっこりと笑って最高の「ありがとう」をくれた。私はわたし前にはやはりドキドキハラハラしていたが、やっとほっと一息つくことができた。

私には集中力が無い。高等学校文化連盟(高文連)に出品する作品にさえ手抜きが見えるほどに大雑把で、一つの作品に集中することができないのである。そんな私がこんなに長い時間、絵を描き続けていたことは奇跡に近いのだ。

普段とちがったことは一つ、「新しい出会い」である。自分で話しかけなければいけない緊張感や、老人たちとの会話、スタッフの方々とやりとり等、今までに無かった体験のオンパレード。そんな中で絵を描くことは本当に大変だったが、不思議な楽しさがあった。そういったことたちが、私のあるのかもわからないような集中力を保たせてくれたのである。

私は「アート」は常に新しいものに触れ合

うことで良いものになっていくのではないかと考える。新しい出会いの中で自由に楽しんで描く絵は、一人真っ白な紙に向かってガチガチの頭で考える絵画とは比べ物にならない生き生きとしたものになる。

普段から柔軟にいろんな角度から物を見ようと努力はしているのだが、この体験は全くの別物だった。こういった経験は滅多にすることはできないが、普段からもっと周りに目を向けることはできるはずである。小さな新しい出会いを繰り返していく中で作り出す作品は輝きを増していくのではないだろうか。

(おのやま こそえ)

川本磨由

北海道 立命館慶祥高等学校

サルバトール・ダリ。彼ほど、印刷された写真と本物との印象が違う画家もなかなか存在しないだろう。「絵とは本物を見ないとわからない」と言うが、彼はその代表であると思う。

私は、正直に言うとダリ展を訪れるまで、ダリが全然好きではなかった。訳のわからない絵ばかりで、新聞に載っている作品を見る限り、私の興味を引きそうもないと思った。私は、絵は人に何かを思ってもらうためのものであって、あまりにも題名や絵が突拍子もなさ過ぎると意味がないと言う考えを持っていたからだ。

だが、夏休みの学校の課題のため、展覧会を見に行くことになった。三つの展覧会の中から選択する方式で、私は友達に誘われてダリ展を訪れることになった。そして、実際に目の当たりにした作品は私の考えていたものとは大きく違っていた。彼の絵は時に立体的に、時に平面的に、時に清澄に、時に躍動して私たちを驚かせる。スタイルなどは存在せず、描くものを自分の感じたとおりに描き出そうという風に。そしてそれらの絵画は、私たちにそれぞれの思いをぶつけてきた。「突拍子もない作品」なわけでは全くなかったのだ。

では、なぜ新聞などの写真ではそれが伝わってこなかったのか？

その最も大きな原因は、彼の絵がとても繊細に描かれていたことであると思う。彼は、さっと見ただけでは気づかないようなところまで非常に細かく描き、いわゆる「だまし絵」のような「ダブル・イメージ」などを多用していて、新聞など印刷では良く見えないとこ

ろが題名と密接に関わっているのだ。このような一種のパズルのような「謎解き」が、他の絵とは違った方面で私達を楽しませてくれるのである。新聞などの絵はそういう方面が多く、私はその写真だけを見て判断してしまっていたのだ。

ただ、それはダリの技術的な話であって、それだけでは心に響いてくるものには成り得ない。うまく表現できないが、私はもっと別のものを感じた。

それを最も強く感じたのは、ダリ展を訪れて最初に目に付き、最後まで気になっていた作品である。

それは、「幽霊と幻影」という作品だ。

この作品の大半は雲によって占められている。果てしなく地平線が広がる中、乳母姿の老女が一人、背を向けて水溜りの中に座り、絵の隅には死を象徴すると謳われる「糸杉」が一本、唐突に伸びている。そして、雲の合間にうっすらと今にも消えてしまいそうな虹が描かれている。私はこの作品を一目見たとき、一瞬自分もそこにいるような錯覚を覚えた。そして、その壮大さに惹きこまれた。確かに寂しげで、不安げな印象しか与えない絵だった。ある意味では不気味でもある。しかし、その吸い込まれるような景色は、それでもなお最後まで私の心の中に留まっていた。ただ、私が最も強く感じていたのは、不安でもなんでもなく、その「広さ」だった。その果てしなさが私の心を捕まえたのだ。

この作品が気になって気になって、帰り際画集を買った。だが、家に帰って画集を見て、

私は落胆した。

あのなんとも言えぬ開けた空間の感覚が全く伝わってこなかったからだ。

この作品は「ダブル・イメージ」や技術的に表した点はなく、そこまで緻密に描かれなければならない作品ではなかったので、あの感覚の面影だけでもつかめると思っていた。だが、あんなに惹かれた作品なのに、いざ画集を見てみると他の絵が異彩を放っていて、解説を読んでいるうちに、なんだかそれらのほうが素晴らしく思えてきた。私は何かそれらの作品において大事なものを見落としていたのだろうか？私は自分の感性に不安を覚えた。でも、私はあの絵の前に立ったときの感覚を「気の迷い」なんかにしたくなかった。

私は、レポート用の手帳を開いた。「幽霊と幻影」を見たときの印象も、そこに書き綴ってあった。「寂しげ」、「不安」など、解説を写したような文字が羅列していた。すると、一つ、大きな字で書かれ、マルで囲まれていた文字があった。

「広」だった。その字を見た瞬間、私は間違いなく「あの作品」に惹かれたのだ、と確信した。あの作品のどこが良かったのか、どこが好きだったのか、一瞬にして思い出すことが出来た。

今回のダリ展では、他に有名な作品や新聞に多く取り上げられた作品が数多くあった。絵だけではなく、写真や立体、その展示の仕方まで、細部まで凝った趣向だった。まるで、ダリの絵の緻密さそのものを表すように。でも、私はそんな有名な作品よりも、やっぱり「幽

霊と幻影」に惹かれる。最初、画集を見たときは確かにそれらの作品のほうが素晴らしいように思えた。だが、そうではないと気付いた。

「芸術」は人に見られるものであり、それを見て何かを想うのは「見る人」の勝手だ。あの絵を見たとき感じたのは、解説に書かれていない、所詮私だけの印象だ。しかしそれが何だと言うのだろうか。「芸術」とは元来そういうものではなかったか。「人の評価」なんて関係ない。私が一番同調したのが「幽霊と幻影」で、それを見たとき感じた寂しさも、果てしなさも、私が確かに感じたことだ。「どっちが素晴らしい」なんかじゃなく、私自身で感じたことが私にとっての「ダリ展」なんだ。

そう気付いた瞬間、今までの不安が嘘のように、すっと溶けて消えた。

(かわもと まゆ)

参考文献：「生誕100周年記念 ダリ展—創造する多面体」

北方萌子

神奈川県 横浜雙葉高等学校

私はアートが好きだ。デザインや色彩のセンスに触れているのが好きだ。文房具や本の装丁など、身近でアートを見つけると嬉しくなる。美術館にもよく足を運ぶ。とは言え、誰かに学んだわけでも、日常的に芸術が身近だったわけでもない。絵画教室なども憧れで終わり、父も母も芸術方面に関心が深くはなかった。

アートに対峙した時、身構えてしまう一瞬は、これに起因するのだろう。自分が感じるように楽しめば、「アート」になる。そう心にはあっても、『芸術なんて小難しい』と敬遠する友人の顔などを見ていると、疑念と不安が渦巻く。私ごときがアートを口にして良いのか。私は本当に「アート」が好きなのだろうか、と。

芸術は、知識や技術や才能だけに囚われない。そんなつまらないモノじゃない。それを誰かに伝えたかったのだろう。だからこそ、高校で「美術」を芸術科目に選んだように思う。素人の私だって、アートできるのだ。堅苦しく考える人に、そう示したかった。

高校最初の課題は油絵だった。予定していたテーマは、学校周辺の風景画。だが、時は雲も滴る梅雨である。屋外での授業は雨に流され、校内でのスケッチを余儀なくされた。校舎がモデルと聞いて、ひらめいた構図があった。塔階段の描く、ゆったりとした螺旋を、最上階から覗き込む。立ち昇ってくる光を眩しく捉える。渦を巻く段は、立体的で、よい

主役だと思った。

しかし実際に描きだして、一番苦戦したのは、階段の表現だった。段ごとに色味を少しずつ変えれば良いか、などと甘く見ていたのだが、それほど簡単ではない。多少グラデーションをつけたところで、違いが見えない。また、段数が多すぎて、一段一段明暗のみで描きわけることは不可能だった。それだって、レンブラントやフェルメールのような巨匠なら、造作もないことだろう。でも到底私にはできない。つまり、私はここへ来て、己の技術不足に泣くことになったのだ。

それでも私は、諦めることができなかった。このアイデアが良い絵に成り得ると信じていたし、自分でも気に入っていた。匙を投げてしまえば、「楽しむだけでもいい」「必ずしも知識は必要でない」と言った自ら、その言葉を嘘にしてしまう。

私の筆は、いつからか、モチーフを形どる境界線を潰すように動いた。茶色い手すり、緑色の石の階段、白い壁。きちっと区切られた世界は、キャンバスの上で、一つに収束するようだった。濃紺で手前の一角に影をつけ、画面の奥からは白い光を昇らせた。私は、主役を、小さな面で捉えることにした。モザイクのように、不規則な面だ。青があるかと思えば、赤があり、白かと思えば、オレンジが。隣同士だからといって、決して交わらない絵の具たち。手すりの影が、階段の影が、すべて黒にはならない世界。緑だったり、赤だっ

たり。暗い部分の色を統一したり、規則性を持たせたりすることも考えた。しかし、好き勝手に、突拍子も無い色をそこかしこへ、とび散らせるほうがしっくりきた。私は何かに反抗するように、ともすれば、まとまりのない、激しい色遣いに没頭した。

私の頭には、確かに、偉大な作品の数々が、意識されていた。それでも、一つ一つを挙げることはできない。それはモネの印象派のようでもあったし、スーラの点描法のようにもあった。また、そのときちょうど展覧会で観た、マルレーネ・デュマスの鮮やかさに通じるものもあった。だが、最も影響を与えたものは、名も知らぬ一枚の絵画だと分かる。

旅行先のドイツの美術館で出会った一枚だ。題名も作者も分からない。しかし、一目見たときの衝撃は、しっかりと胸に刻まれている。その部屋に入った途端、温かみのあるオレンジ色の画面が視界を支配した。活気あふれる飲食店を描いているのだが、人影と分かる黒以外、全体が橙や黄色の筆跡に包まれている。熱を感じた。人々のざわめきが聞こえてくるようだった。人やテーブルの輪郭も、ぼんやりとして、はっきりしないのに、キャンバス全体が、冷めやらぬ熱気を表現していた。

私は、その感動を、自分の作品にぶつけた。技術の不足を補うだけで始めた手法、それはもう、私の描き方だった。塗り重ねるうち、平坦になったり、色がバラバラになったりと、表現力に悩むこともあった。だが描き続けた。

完成した作品は、クラスで評価され、校内に飾られることになった。美術で褒められることなど初めてだったので、嬉しかった。

やはり、私は伝えたい。どれがアートで、どれがアートでないかではなく、何を「アート」と感じるかが大切なのだ、と。私はアートを知識で批評できずとも、好きなアートを語ることはできる。そして、はじめの一步が踏み出せば、そこから進むことのほうが楽であることも、併せて記しておきたい。

(きたがた もえこ)



北方萌子 《Unknown》 2007年 油彩・キャンバス  
65.2x53.0cm

## ■ 優秀賞 まるで似ていない肖像画から考察する

### 日本人の絵心

栗本 咲

北海道 札幌平岸高等学校

歴史の授業などで、教科書や資料集に挿入されている歴史上の人物の肖像画を見る機会が、誰にでもあるだろう。日本史にしろ、世界史にしろ、有名な歴史上の人物は画家なり絵師なりに自分の肖像画を描かせている人が多いと思う。この肖像画はそれこそ古代に近づけば近づく程、とても写実的な肖像画とは言えず、多くの人は「本当にこんな顔をしていたのだろうか？」と疑問に思うだろうし、実際とてもその肖像画はあてになるとは思えない。近世に近づくにつれて、肖像画はどんどん写実的になり、肖像画から実際に会ったことのないその歴史上の偉人達の顔を容易に想像出来るまでに及んでいる。日本は西洋に比べると写実、リアリティ、そういったものを追求し始めたのはだいぶ後になるだろう。西洋の写実的な絵が日本に入ってきて、日本の絵に大きな影響を与え、写実の風潮が広まるまでの間、日本人の肖像画はあまり当てにならない。写実とはかけ離れたものであり、どちらかというといラストに近いものだったのだろう。しかし私は、そこに日本の絵の面白味を感じる。

現在多くの写実派の画家が日本にはいるが、漫画やゲームの人気などからも予測できるように、日本の絵、日本の製品は写実というよりもイラストテイストの強く、デザイン面を重視したものが多い。日本人はファッションに対する関心も高く、デザインされたもの、おしゃれなものが好きだ。ようするに、見た目を重視する傾向が強いのではないかと思われる。絵にこんな言い方をするのはおかしい感覚なのかもしれないが、写実の絵は、実用的で、内面を重視したものに感じられる。それに比べイラストなどデザイン面を重視されているものは、鑑賞用、外面を重視したものに思える。日本人ははるか昔から、写実というよりイラストのような絵を好み、描いてきた。西洋のように、写実的であることがそれ程重視されなかったのは何故か。もちろん、昔は材料や道具、技法・技術が今と比べて発達していなかったことも大きな要因のひとつだろう。だが、自分は、写実にこだわらなかったことに、何か意図的なものを、強い意志を感じるのだ。

葛飾北斎や歌川広重など、海外において高

い評価を得ている日本画家は、当然ながら写実性を評価されているわけではない。ならば、一体どういう点において高い評価を得ているのか。それはおそらく、日本画特有の、大胆な構図と色使い、写実にこだわらず実にのびのびと描かれた絵が、西洋の絵とは大きくかけ離れているものであり、それと同時にとても印象深く心惹かれるものである、という点だろう。ゴッホなどは浮世絵を模写する程浮世絵に感銘を受けていたらしいから、西洋画が日本画に与えた影響が大きいように、日本画も西洋画に影響を与えたのだろう。

日本人は昔から、西洋の人間ほど写実にはこだわらなかった。最初に言ったように、日本の昔の肖像画はとても肖像画とは言いがたいほど写実的ではなく、まるであてにならない。とてもその肖像画から、歴史上の偉人達の実際の姿など知ることはできないだろう。ならば、一体なんのために肖像画を描いたのだろうか。それはおそらく、知るための肖像画ではなく、想像するための肖像画なのだろう。歴史というのは、もう昔のことだからほんとうのことを知ることはできない。物品な

どの証拠を少しずつ集めて、歴史の断片を繋ぎ合わせて、始めて「こういうことがあったのだろう」という推測を立てることが、想像することができるのだ。物的証拠を集める以外に私たちが歴史に触れる方法は、想像力、イマジネーションを駆使することだ。私たちは歴史の断片から過去を想像する、もう戻ることのできない遠い昔を。それはあくまで想像であって、真実を知ることはできない。謎は謎のまま。しかし人間は、謎なものにこそ惹かれるものだろう。昔の絵師達が描いた肖像画は、謎を深め、人に印象づけ、想像させるための肖像画に思えるのだ。ほんとうのことがわからないほど、人は真実を追い求めるために想像力を働かせる。けして私は、日本のまるで似ていない肖像画が、西洋のリアルな肖像画に劣るとは思わない。はるか昔から写実にほとんどこだわらなかった日本人の絵心は、現在も日本人に変わらず受け継がれているような気がする。

(くりもと さき)

後藤あかり

宮城県 宮城野高等学校

気持ち悪い。この本を見て、大体の人が最初に抱くのはこの一言だろう。

わたしがこの本に出会ったのは、2年前、とある本屋でだった。わたしはこの頃、新たな高校生活というものに不安を感じていた。その最大の一因は、中学生の頃、いじめを受けていたことにある。そこで1番よく言われた言葉が「キモい」だった。毎日その言葉はわたしの代名詞のように使われ、わたしを苦しめた。特にその中でも記憶に残っていた一言が、「手が白くてキモいよね」だった。わたしを、わたしの生み出したものすべてを否定するのに十分な言葉だった。

だからこの表紙(図1)を見たとき、わたしは過去からくるどうしようもない拒絶感を抱く一方、もうひとつのわたしの手に出会ったような同一感を持ち、同じ痛みを知っているこの手に、深い安堵感を覚えた。わたしは、今まで息を潜めていたその時の殺意がむくむくと蘇ってくるのを感じた。わたしは怖かった。高校生活がああ状況の二の舞になるのも嫌だったけれど、わたしにとってもっと恐ろしいのはあの時の自分に戻ってしまうことだった。わたしは本を置き、その場を去った。

そして今、もう一度この本を手にし、この文を書いている。

この作品に出てくるほぼすべてのものは、指から生まれている。指から生まれる、ということ、わたしたち人間の営みを示してい

ると思う。わたしたちは指先で箸を持って食事をし、ものに触り、携帯で連絡をとる。そしてつま先でバランスを取り、二足歩行する。地上に初めて降り立ったヒトも、きっと指先から何かを生み出したに違いない。そう考えると、物事のすべての起源は指先にあると言っても過言ではないだろう。その指先を用いることによって、作者は「生み出すという行為の生々しさ」を表現したかったのではないだろうか。この本は『むかしむかし、まだどんな人ののぞみでも、思いどおりにならなかったころのことです。』から始まる。その冒頭のページに書いてあるのは指の関節から皮をマントのように羽織ったお姫さま。つまり、束芋はこれがお姫さまが生み出した物語——つまりこの手はお姫さまの手であり、すべてはその手のひらにあるということを、暗示しているのではないだろうか。カエルを床に投げつけて殺すのも、それが王子さまになるのも、すべてお姫さまの謀だったのではないだろうか。同じようにあの頃のわたしも、この手指に囚われていたのだと思う。この手で触ったものは汚いと言われ、作ったものは罵られる。このお姫さまが自分の意図である手で世界を捉えていたのとは逆に、わたしの手はわたしの心を捉えていたのだ。

そしてこの鮮やかな色使い。なぜこのような色を用いて描いたのだろうか。



わたしはこの色使いはお姫さまのカエルに対する憎悪などの狂気―彼らがわたしに向けた同じ気持ちを皮肉ってこのような鮮やかな色を用いていると思う。様々な色というのは、ヒトに楽しく、美しい印象を与える一方、マッドな感じを与える。それとお姫さまの容姿の美しさをかけてこのような配色を用いたのだろう。

挿絵(図2)は最後以外、非常に鮮やかに、精密に描かれている。お姫さまが作り出したことを暗示させるような頭から湧き出る泉、それに縋りつくカエル、そしてカエルを食べてしまいたいと思う食卓、カエルを殺しお姫さまじゃなくなったお姫さま―そのシーンまでは描かれているが、ここにはラストシーンが描かれていない。

そのラストシーンをなぜ東芋は描かなかったのか。この挿絵の最後の部分は非常にシンプルに、余白が画面を多く占めたものになっている(図3)。ここにわたしは作者の強いメッセージ性を見た。他のページに比べこの部分は極めてシンプルであるが、この絵はわたしに教えてくれた。この手は「キモい」わたしの手ではなくて、お姫さまのようなわたしの憎んだ彼らの手だったことを。わたしがこの手を見てぞっとしたのは、勿論二の舞になることを恐れていたからでもあるけれど、自分もまた都合よく人に振る舞い、誰かを犠牲にする手になりたくなかったからだった。

どうしてもこの世の中では力の上下関係は避けざるを得ないし、それが無ければいけない部分もあると思う。確かに大きなベクトルの向く方に進んでいくのは楽で、周りから同意を得やすく、自分を正当化できるかもしれない。しかし、やはりその力に怯えて流されてはいけない、わたしの苦しみを味あわせてはならないと、東芋は警告してくれた。わたしは今、この「キモい」手をすこし誇らしい気持ちで見つめることができる気がする。あのとき、持っていなかったものを今のわたしは確かに握りしめているから。

昨日、わたしは友人に尋ねた。「わたしの手って、どんな手？」

友人は答えた、「すごくしっかりした手だね」と。

(ごとう あかり)

題材：グリム童話 アーティストブックシリーズ『カエルの王さま または鉄のハインリッヒ』東芋 矢崎源九郎訳  
同書から引用と図版

応募作品には図版がありますが、著作権等に配慮して、本作品集では掲載していませんのでご了承ください。

進本茉莉奈

東京都 トキワ松学園高等学校

絵を描くことは楽しい。鉛筆や木炭で描く線、練り消しやパンで描く光、手やガーゼで描く存在感。全てが私の手を通して画面に写し出される。たとえ、形が狂っていても私の手は踊る。間違いに気づいては正しい形を求めて再び踊り出す。そして、私の心も踊る。私は絵を描く時の感情に、最近になってやっとプラスの面が感じられるようになった。

少し前の私には今の自分が想像できなかった。絵を描くことに私は強い拒否感を覚え、恐怖に近い感情すら抱いていた。絵が好きだと思って入学した今の学校で、私は自分が今までいかに井の中の蛙であったのかを思い知らされた。周りの目、自分の能力、思い込み…その他、多くのものが無知な私に襲い掛かってきた。描こうとしても手は私の意志とは違った方向に動いた。自分が見ているものと連動させたいのに手は言うことを聞いてくれない。「こうではない。こんなはずではない。」日々、このような思いに追い詰められていた。そして、私は思うようになった。「私には向いていないのではないか？」自分の鉛筆が出す音も、他人が出す音も全てが不快音にしか聞こえなかった。全てが不快だった。

そのような時、ある事件が起こった。友人と些細な事から気まずい関係になったのだ。

そして、その友人に対する一方的とも言える闘争心が私の中に沸き起こった。人一倍負けず嫌いな私は、その日からライバルに負けなためだけに、あらゆることを頑張ったと言っても過言ではない。勉強にも熱が入り、絵に対しても「負けたくない、頑張ろう。」という気持ちが沸いてきた。しかし、私はそのような自分の中に醜さも見出した。無駄な、負けず嫌いの精神が、私にくだらないプライドを語らせ、自らを崖っぷちに立たせるようなことをしてしまったのだ。負けたら落ちるが、勝っても余計に苦しさが増すだけ。私は自分が壊れていくような気がした。「きっと私は変わらない、こんな気持ちでは絵なんて好きになれない。」考えれば考えるほど苦しかった。絵を描くことに拒否感を覚えていたのは、本当は自分の実力に直面して自分を傷つけたくないから。恐怖を感じていたのは、周りの人にそのような弱い、臆病な自分を見せたくないから。しかし、女手一つで私を育ててくれた母の期待は裏切れない。私は醜い感情の渦に飲み込まれていた。

そんなある日、美術の予備校で、初めて石膏のマルス像を描いた。マルスは背中が広くて筋肉が豊かで、整ったきれいな顔立ちをしている。頭では理解しているのに、やはり、

私の手は私の意志を理解してくれなかった。そして、また、私の中にあるくだらないブライドが出現した。上手に描かなければ先生に怒られる、他の人に勝るものを描かなければ見下される…。このような気持ちで描き上がったマルスの出来は最悪だった。単調なグレートーンで、胸にはたくましい筋肉があるはずなのに、ただ大きいだけのふわふわした胸板になってしまい、斜め下に傾けているはずの顔は、真横を向いてしまっていた。どこをとっても中途半端…。そこには描いた本人がいるようだった。これといった光る部分もなく、明らかに未完成で、悩んでいるというよりも頑なに考えを変えようとしないう自分。先生にも言われた。「マルスのようでマルスでない」と。この絵はつまりは私自身で、その「私」に私は平手打ちされたような気分になった。悔しくて泣きたかった。もう絵を描くのをやめようとも思った。しかし、そんな感情とは裏腹に、私の胸の中には、ほんの小さな炎が灯った。それは、自分自身に対する負けず嫌いの炎だった。泣きたくないなら、うまくなれ！悔しいなら見返してやるくらいの絵を描いてみる！描きたくないなんて言うな！…そんな感情が次から次へと沸き上がってきた。そして心の底から思った。

「うまくなりたい！うまくなりたい！！」

次の日の私は少し違った。モチーフが何を語っているのかを聞こうと、体中の神経をただモチーフに集中させ、感じ取ったことを指先に伝えることに全力を注いだ。モチーフはカボチャと立方体が数個。心の一番深いところから沸いてくる、昨日までの自分には負けたくないという負けず嫌いの精神と、少しの好奇心で胸が一杯だった。

そして、私の手は踊り出したのだった。カボチャは主人公で立方体は脇役だとか、中身は詰まっているだろうかとか、表面には見えないことも想像しながら描いた。目から頭から手に情報を伝えた。手は、いつもとはあまり変わらなかった。しかし、何かが変わった。間違っては消し、また描く。それを繰り返すことによって、ほんの少しずつではあるが、モチーフに近づいていく。時間が経つのがこんなにも早いとは思わなかった。不快音だった鉛筆の音が、今では心地よい音楽のようにも聞こえてきた。絵が描きたいと思ったのは、どれくらいぶりのことだろう。私は一つ、壁を越えた気がした。

(しんもと まりな)

杉田陽一郎

東京都 筑波大学附属駒場高等学校

僕が小学生のとき、ある日担任の先生が授業中に一枚の写真を教卓から取り出した。その写真には、一人の少女がハゲワシを目前に危険に晒されている状況を写したものであった。そして、先生はこう問うた。「よく考えてごらん。このカメラマンは本当ならすぐにこの少女を助けられるはずなんだよ。なのに、のん気にこんな写真を撮っていてイイのかなあ？」この頃の自分というのは人の意見にすぐに流されてしまうような、まだ幼い子供であったから、「ああ・・・たしかにそうだよな。このカメラマンはなんてワルイ人なんだ。」とその時は思った。しかし、また先生はさらにこう続けた。「でもね、このカメラマンの人がこの写真を撮ることで世界中の人にこの様な貧困と危険に満ちた所が存在することを伝えることが出来るんだよ。もし、伝えることが出来たならば、世界がこの様な問題に関心を持って何か解決する方法がでてくるかもしれないよね。」こうなるとまた僕の心は大きく揺れた。「そうだよ。このカメラマンがこの写真を撮らなかったら、世界中の人たちは誰もこの事実を知らないで、たくさんの救うことが出来たかもしれない命が無駄になっちゃうよ。」このアンビバレンツな思いの中に僕はいた。片や、目の前の少女一人を救うこ

とできるが、多くの同じような境遇にある人々を救う機会を逃してしまう。また一方では、その様な多くの人々を救う機会を得ることが出来るが、その目の前の少女一人は死んでしまふかもしれない。幼い自分には、この二つにプライオリティーをつけることは酷であった。その様な二つに一つの境遇に出くわしてしまったカメラマンが不幸に思えたくらいであった。僕ならきっと選択の重圧に耐えかねて逃げ出してしまったと思う。

今の自分も未だにこの二つのアンビバレンツな思いを拭いきれていない。ただ、この問題はモノを伝えることに伴う責任の重大さを声を大にして物語っているように感じる。「何かモノを伝えること」、これが僕は「アート」だと思っている。そして、ここでのモノとはなんでもいい。感じたこと、思ったこと、言いたい事、なんでもいい。そして、これらのモノをどう伝えるか、これも様々でいい。絵画、美術、写真、音楽、小説、映画、詩、彫刻、論文など、なんでもいい。そして、そんな「アート」の中に我々は作者の個性や伝えたいことを感じ取っているのだと思う。ただ、これらの「アート」はただ美術館の片隅で「オレのこと見たかったらみれば。別に凡人にはオレの事なんか分からないだろうから。」とつぶや

いている無責任な一匹狼であってはならない。このことは、作者に対しても同様である。「アート」を創造する者は、「アート」に対して責任を持たなければならない。

では、元の話にもどってみよう。先のカメラマンは自ら写真を撮ることにした。そして、その写真は世界中で大きな話題となった。もちろん彼は世界中から賛辞の声だけでなく、多くの批判の声を受けた。そして、彼はピューリッツァー賞をもらうも、その後自殺をした。このカメラマンの行った行動は、「アート」の究極と呼んで僕はいいと思う。彼は、自ら厳しい決断をしてその後、自らの決断した「アート」に従い最後までその責任を背負い続けた。そして、その「アート」は世界中で大きな反響を呼び、また影響を与え、好ましい形式をとったかどうかはともかく「アート」としての役割を全うした。これらの行動は「勇気」そのものだと思う。今僕は高校生で「勇気」という言葉を使うと何となくどこか気恥ずかしい感じがする。だが、今この「勇気」という言葉を何のためらいもなく使っている自分がある。「勇気」というとたいていは、正義が悪に立ち向かうなどの実際に大きなアクションをとるときに使うようだが、僕は静かな「勇気」もあり、むしろこちらの方が大きな力を

持つ物だと思う。僕は先に自分が幼かった頃カメラマンを不幸にすら感じたと書いた。今思うとあまりにもそんな自分が情けなく感じる。そして、僕が小さい頃純粹に感じていた「勇気」を今肌で感じている。なんとなく甘酸っぱい香りが心を満たしている感じがする。僕は、彼の生死をかけた「アート」に感動したとともに圧倒させられていた。

街を歩いているとあちらこちらで「アート」を目にする。広告、看板、音声、映像などが我々に対してうるさくしゃべりかけてくる。我々はこれらのことに慣れてしまい「アート」に対してあまりに無責任に、またいい加減になってきていると思う。しかし、何かを伝える以上、我々はその「アート」に対してきちんと責任を負うべきではないだろうか。そして、その様な真摯な態度によって、きっとより一層多くのひとの心にその「アート」を運ぶことが出来るだろう。

(すぎた よういちろう)

応募作品には図版がありますが、著作権等に配慮して、本作品集では掲載していませんのでご了承ください。

経澤 建

福井県 藤島高等学校

私は物心ついた頃から祖父が書道家ということを知っていた。しかし祖父を書道家だと深く意識したことはない。無論、芸術家とも意識したことはない。祖父の作品をまじまじと見たこともない。見る機会もなかった。私にとって祖父とは、字が上手な人、少し有名な人、そんな感じであった。私が書道に興味をもっていたら、祖父に対する感じ方も変わっていたことだろう。

私の友に書道を学んでいる者がいる。彼は私に言った、「書写と書道は違う」と。書写は、字を上手に書くことを目的としているが、書道は芸術なのである。自由に書くことができる。

私はひどく共感した。小学生の頃、書写の授業の際は必ずお手本が手元にあった。皆お手本を見ながら上手に書こうと努力していた。たいてい「選ばれるもの」というのは、俗にいう「上手なもの」なのである。字の形のバランスがよいもの、とめはねができているもの。お手本に倣っただけの、没個性的ものしか選ばれない。決して習字が苦手だった私の僻みではない。だが書道は違う。字の大小、字の太さ細さ、字の位置、全てが自由。そして、見る人によって評価も千差万別。どのように

表現するかである。

今回祖父の書を見るにあたって、様々な作家の書も見た。まるで子供の書いた字のようなものもあれば、流れるように書いたものもあれば、豪快に大きく書いたものもあるのである。字は人を表すと言うが、書道という芸術の前においては、そんなことまったく関係なかった。字なのだが、字に非ず。似て非なるもの。そんな印象を持った。そして、祖父の書を見た。

祖父の書いた作品の中に「寒雀」という作品があった。私は字は読めなかったが、衝撃を受けた。力強く書かれた字と、繊細に書かれた字のコントラストが私の心を、雷が轟くように突き抜けて、私の感性を刺激するのである。私はそこまで書道に興味はなかったのだが、素人の私でも唸ってしまった。字が読めないということは関係がない。書道の好き嫌いも関係がない。初めて見るということも関係がない。自分の祖父だからということも関係がない。やはり祖父は「すごい」のである。「すごい」の一言である。

「寂しい秋」は、非常に緩やかに、さらさらと、まるで滴る水のように書かれている。細々

とした字は、前述の「寒雀」とは趣向が異なる。力強さなど微塵もない。何故なのだろうか。理由はすぐに判明した。どうやら、祖父の父が亡くなった一年後に書かれたようである。人の死を受け止めた祖父は、無念の思いで書いたのだろうか。悲しみに明け暮れたのだろうか。だが私はこの字に悲壮の決意を感じる。無から生まれる生。その決意が、その覚悟が、見る人々の心を動かすのか。

祖父は、1931年に富山の魚津という漁村に生まれ、ずっとそこに暮らしている。幼少の頃から海と触れ合い、漁師の父を手伝ったり、兄弟と魚を捕ったりしていたそうである。冬の日本海の寒さを肌で感じながら、厳しい自然を体全体で受け止めながら。

長きに渡って祖父は公務員として働いていたのだが、37歳の時、公務員生活を終了し書家へと転身した。書道という一つの芸術に魅せられたのだろうか。その決断は、日本海よりも深く、立山よりも高いのだろうか。そういった環境の下で培われた人間性は、大きく、祖父の書にも反映されていると私は考える。祖父の作品の全てを見た訳ではないのだが、少なくともそう感じた。祖父の書道に表われている繊細と力強さという反する二つの特性は、

往年の祖父の感性によって創られていたのか。

祖父の作品には、祖父の人生観が込められている。私は祖父の作品を見て「自分の運命は自分で切り拓いて行くもの」ということを垣間見た。私も自分の道は自分で切り拓いて行かなければならない。祖父のように。

(つねざわ たつる)

※参考 富山県書道人志4



図1 経澤帰帆 前田普羅の句「寒雀」 平成2年  
79cm×182cm 額装

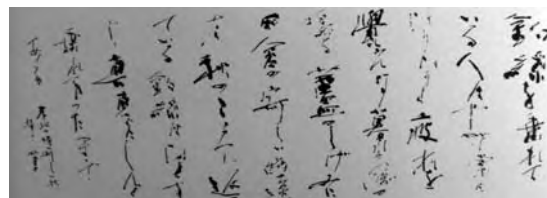


図2 経澤帰帆 宮崎孝政詩「寂しい秋より」 昭和63年  
79cm×182cm 額装

長尾茉莉子

北海道 札幌平岸高等学校

小出茜。15歳。中学三年生。

私がこのアーティストを知ったきっかけは、現代美術家であり、日本のポップアートの代表者である「村上隆」に興味を持ったことから始まった。

彼は、オタク系題材を用いた作品が有名であるが、高級ブランドであるルイ・ヴィトンとコラボレーションし、カラフルなモノグラム「モノグラム・マルチカラー」を発表したことで、かなりの人が絶賛し、今は定番商品となっている。

そんな彼が主宰している「Kaikai Kiki」にスカウトされた小出茜はGEISAIでデビューした。彼女の作品はeye(眼)を中心としているものが多い。中学生とは思えない奥深いものが、その瞳の中に存在していた。どの作品も同じeyeは描かれていないが、訴えているものは同じモノに感じられた。優しい色使い。温かみがある。しかし、何か迫ってくるような危機感も感じられる。

私が気になった『show girl』(図1)は、大

きなeyeの中に女の子が眠っている作品だ。

この女の子は口角少し上がっている。何かいい夢でも見ているかのような温かい表情、そして緊張感のない態勢。作者も学生だが、この絵の中の女の子も制服を着ているので学生に違いない。スカートの中にスパッツをはいているのも、学生らしさを表現している。しかし、普通スカートをはいていると、このような姿はしないだろう。逆に女の子は脚を開かないように注意するのが〈あたりまえ〉だ。どんな夢を見ているのだろうか。足もとには何枚ものお札が落ちている。大金を手に入れた夢？いや、違う。大きなeyeの瞳は、お金から目をそらすように上を向いている。悲しそうな表情にも読み取れるし、吸い込まれるような恐怖感もある。全体的に見ると、お札は、大きなeyeからにじみ出た「涙」のようにも見える。では、なぜ、この女の子は気持ちよさそうに眠っているのだろうか。私はその答えを知らない。だが、私は、わたしのどこかで、その答えを知っている。そんな気がした。



枠からはみ出している片足。ビュウラーを使って長く見せるまつげ。学生なら1度は感じたことのある「縛られたくない」そんな言葉が頭に浮かんだ。

街を歩けば、そこには個性豊かなファッションをした人々が歩き、意味のわからない彫刻が並んでいる。どれも自分が楽しんでいるだけであり、相手にどのように非難されても形を変えない。たまに自分と同じ感性の人がいれば盛り上がり、情報交換をする。個性を尊重する現代社会では、〈あたりまえ〉がない。すべてが芸術(アート)になる。それが「良い」と言う人もいれば、「居心地が悪い」という人もいる。時代の変化により、個性の尊重が強くなっている現在。何が正しくて、何が間違っているのだろうか。

『show girl』は人間の感情、「喜怒哀楽」そして「欲」が描かれている作品であるだろう。同世代、私よりまだ若い15歳のアーティスト「小出茜」。彼女の作品は彼女にしかわからない。どの作品の作者だって、作品は作者に

しかわからない。だが、それを評論する職業が存在するのも確かなだ。芸術とは、自分が相手に何かを伝えることだけではなく、自分自身を見つめることが出来るモノである。

「自分を見つめるもう一つの自分(眼)」を題材とする彼女は、私に、その何かを伝えた。同じ学生だからこそ、伝えられたモノが大きかったのかもしれない。言葉にすると難しく、どのように表現すれば良いかわからないが、〔表には出さない、嘘をついているわけではない、足りない、満たされない、でも楽しんでいる〕といった、感情が伝わった。きつと評論家ならば、もっと相手にわかりやすく説明出来るのだろう。強く伝えることが出来ないが、沢山のことを感じられた作品である。

(ながお まりこ)

参考資料：Kaikai Kiki Co.,Ltd. アーティスト 小出茜  
<http://www.kaikaikiki.co.jp/artists/list/C31/>

応募作品には図版がありますが、著作権等に配慮して、本作品集では掲載していませんのでご了承ください。

原口寛子

北海道 立命館慶祥高等学校

『両界曼荼羅』—私が初めてその美しい絵画を目にしたのは、高校2年生の夏、日本史の授業でのことだった。「妖しく、神秘的な美術」と説明された密教美術を代表する曼荼羅は教科書には掲載されておらず、資料集にひっそりと、しかし不思議な存在感を醸し出して掲載されていた。密教で重んじられている大日如来を絵の上部に配し、智徳を表す金剛界と、同じく大日如来を絵の中央に配し、慈悲を表す胎蔵界の2つに区分され、大きなタペストリー状の紙に整然と密教の世界を図化し、修行に使用されるものだという。私は、曼荼羅をひと目見た瞬間に—このような言い方が許されるのならば—恋に落ちてしまった。

曼荼羅のどこが良いのか、と質問されて、明確に答えることはできない。「なんとなく」、好きなのだ。計算しつくされた仏の配置や、妥協を決して許さない精密さ、そして鮮やかな配色など……私が普段描く、アバウトな構図や細密さを持たない絵とは正反対の要素が散りばめられているからかもしれない。しかし、そんな曼荼羅に対する思いが曖昧なものから確かなものへと変化する出来事があった。今年の5月に、北海道立近代美術館で催され

た「空海マンダラ」で、初めて実物の曼荼羅を目にしたことだ。この展覧会では、空海が生み出した真言宗に関連する美術品を展示したもので、絵画だけではなく、三筆の一人と謳われた空海の書や、運慶・快慶による仏像が数多くあった。国宝級の素晴らしい美術品を鑑賞しているうちに、私は白い壁に囲まれた広いスペースにたどり着いた。そこには、向かい合った壁に、それぞれ高野山金剛界・胎蔵界曼荼羅が掛けてあった。2つの曼荼羅は絵の具が剥がれ落ち、多少の痛みを窺うことはできたが、荘厳さと美しさ、迫力は十分に伝わってくるものであった。

私はその2つの曼荼羅を目にした瞬間、やっと実物を見ることができた、という興奮が湧き上がるのと同時に、この巨大な絵画に少しずつ飲み込まれてしまうような感覚に襲われた。数十の仏たちが私を静かに、厳しい眼差しで見つめ、絵そのものの秩序を彼ら自身で守っているように見えたのだ。まるで、「この絵を乱すな」と警告するように。そこで初めて、私は密教がなぜ絵画を用いて自らの思想を表したのかが、少しだけ、わかった気がした。この絵画から湧き出る厳かな空気に、鑑賞者

は感覚を少しずつ奪われ、彼らが作り出す宇宙に身を委ねる。絵という万人が認識できるツールを用いることによって、その世界に人々を引き込む。絵画の力の偉大さを肌で感じた瞬間だった。

曼荼羅が持つこの巨大なパワーは一体どこから起こっているのだろうか。美術館からの帰り道、私はこう思わずにはいられなかった。

曼荼羅の根本にある密教とは、空海と最澄が平安時代、ともに唐に渡り、日本に伝えた仏教の一種である。密教が伝わる以前、日本では聖武天皇・光明天皇の発願により各地に国分寺・国分尼寺が建立され、仏の力で災厄を鎮め、国を護ることを意味する鎮護国家思想が隆盛を極めていた。この思想により、仏教は国家の手厚い保護を受け、国家権力と結びついた奈良仏教は次第に腐敗していった。そんな中で、密教が出現した。この仏教も「国家のための教え」という性格を引き継いでいたが、主要な寺社を山岳に営み、万物に成仏の可能性を認める教えを説くなど、従来の仏教にはない方向性を打ち出した。

私が鑑賞した曼荼羅は、真言宗のものである。真言宗を生み出した空海によれば、人は「三

密」という、手に印契を結び、口に真言を唱え、心を仏に集中させる修行をすれば、即身成仏を成すことが可能であるという。

この修行を大きく支えるのが、曼荼羅である。平安時代、文字を読み書きできるのは一部の上位層であり、一般市民にとって、「勉強して」教えを理解する仏教は遠い存在であった。密教は、曼荼羅を用いることによって教えを図示し、知識・教養のない人でも理解することを可能にした。それは、西洋における教会のステンドグラスと同じ効果を持つ。大きな建築物や大仏といった、物質的な迫力で仏の脅威を示したのではなく、薄暗い寺の中でじわりと浮かび上がる、数え切れないほどの仏の神秘的な迫力で、人々の心を掴み取ったのである。

絵を鑑賞する、という行為のみで人々を別の世界へ誘う—曼荼羅は、人間の視覚のみならず、心を直接揺さぶる芸術である。それは、現代アートとは一味違う、体験型美術であったのかもしれない。

(はらぐち ひろこ)

笛田満里奈

鹿児島県 鶴丸高等学校

美術館の奥へ進むと、壁いっぱいの、とても大きな一枚の絵が飾られていた。人が、迫り来る死の恐怖に、親や子を殺さねばならない苦しみ、悲しいとか苦しいとかそのような言葉では表現し尽くせない表情でひしめいている。真っ赤な血と炎がとても印象的だった。

これは、作者の丸木位里・丸木俊夫妻が、戦争を二度としてはいけないという想いを託した「沖縄戦の図」だ。沖縄の佐喜真美術館に展示されている。

沖縄での地上戦、島民たちは米軍を鬼畜米兵として恐れ、捕虜にされたり殺されたりする前に自ら命を絶つようにと命令されていた。捕虜になってまで生きることが恥であり、他の人々が死んでいく中、自分たちだけが生き残ることはできないと愛する家族を手にかけて。軍から配給された手榴弾や、身の回りにあったあらゆるものが凶器となった。

沖縄は、日本で唯一地上戦を体験した地だ。唯一、だからこそ丸木夫妻は絵を描いたのだと思う。絵は人の目に触れること無しにはその想いを多くの人に伝えることはできない。この絵に感応した、館長である佐喜真道夫さんはそう考えて美術館に展示しようと考えた

のだそうだ。沖縄戦の記憶を、次の世代に伝えていくために。

私は、広島原爆写真展にも足を運んだ。そこにはたくさんの「原爆の絵」が展示されていた。原爆直後の人々の様子を記録した写真はわずかしかなかった。だから今は、被爆者の体験によって描かれ、一般の人々から寄贈された絵だけが貴重な資料なのだという。描き出された表情には悲しみがにじんでいる。くすぶる紅い炎や血、浅黒い肌色に、戦争への憎しみが渦巻いている。ただれた皮膚を地面に引きずりながら歩く人。水を求めて防火用水の中に飛び込んだ人々はゆだったようになっている。人が人でないものになっていく恐怖を、悲しみを、憎しみを、その絵は内包しているように感じた。沖縄で見た絵と同じように、見る人々に何かを語りかけてくる。

私たちが普段見ている報道の映像は、大抵第三者からの目線で撮られている。爆弾が炸裂し、建物が破壊される。しかしその建物の中で恐怖におびえ、逃げまどう人々は映されてはいない。感情や痛みは伝えられてはいないのだ。一方絵は、普段私たちがニュースなどで目にする戦争の報道の映像とは全く違っ

ている。絵は実体験の表面的な映像を正確には伝えないかもしれないが、それを描いた人の心情やそれに対する印象というものはつきりと持っている。そしてそれは、絵を見る人々の心に直接的に訴える力がある。

報道の映像では、兵隊もやはり人間として映る。しかし、戦場にいる人々にとっての兵隊は残酷な悪魔のような存在だ。そういった本当の真実というものは、表面的に切り取られた映像では伝えられない。

だから人は、絵に自分の思いを託して見る者に訴える。絵に想いを託すことは、絵に使命を与えることだ。それは人に何かを伝えるという使命だ。私たちは絵に自分の魂を込める。絵が人の眼に触れ続ける限りずっと、その魂は人の心に何らかの形で触れてくる。例えば、ピカソの「ゲルニカ」は今でも人々に戦争の愚かさを訴え続けている。

私は「無言館」の巡回展となる「遺された絵画」展を訪れた。学徒動員された画学生たちは、最後まで絵を描きたいと思いつけながら出兵していったのだろう。その思いが、一生懸命に描かれた絵からにじみ出ているようだった。大切な人や大切な時間、力強い生命力、そういうものがかれらの絵には溢れてい

た。戦争は、彼らが人間らしく生きられる時間を奪い、彼らと同じように生きている人間を殺させた。私は、多くの可能性と未来を失わせた戦争を許さない。

無言館の窪島館長は、鹿児島での講演でこう語った。「人は自らの生で出会う感動を、また別の人に伝えるために生きるのではないのでしょうか。本来、そうやって人はつながり合い生きてきたのではないのでしょうか。」

私は、一人で平和や戦争反対を訴えたところで戦争が終わるわけがない、そう考えたことがある。しかし、人それぞれが、世界を支えているレンガの一つであるならば、色をしみ出させて隣のレンガをじわじわと染めていくように、世界に影響を与えられるのではないか。

私が出会ってきた方々も、各々にできる方法で平和を訴えていた。私は絵や文章をかくことが好きだ。私がこの世界に影響を与える術を持って生まれたのなら、自分のできる方法で、この世の真実を伝えていきたい。どんなに小さな力でも、無力ではないと信じて、私はずっと絵を描き続けていこうと思う。

(ふえた まりな)

福岡 仁

神奈川県 みなと総合高等学校

公園、トイレ、トンネル、シャッター。外を歩いていると色々な場所で大小様々な絵を見かける事がある。

そう、落書きのことだ。

落書きを見かけたらあなたはどんな事を考えるだろうか。迷惑だと怒る人もいるだろうし、少ないと思うが、喜ぶ人もいるだろう。僕の考えは前者だ。確かに中には凄いと共感してしまう絵もある。しかし、許可をとらずに好き勝手に書いてしまうのはルール違反だ。まして、人様に迷惑をかけるなら尚更だ。

僕は小さい頃海外に行ったことがある。そのバスは酷く、全部の座席に落書きがされていた。これではとても座る気になれなかった。僕が落書きを迷惑だと感じるのは、この幼い頃の体験が根強く残っているからだ。

では何故落書きをするのか。そんなことを考える出来事があった。

それが、「SOTW」というイベントだ。

「SOTW」とは「桜木町 ON THE WALL」の略で横浜～桜木町間の高架下、約1 kmある壁に絵を描こうというものだ。まだ寒さの残る2月上旬、そのイベントは始まった。

この企画を立ち上げたのはNPO法人コンポジション、通称コンポジと呼ばれる人達だ。

この人達は、「SOTW」以外にも公園の壁やビルの壁など様々な場所に絵を描く計画を立てている。

壁に絵を描く。それも深夜にコソコソやるのではなく、昼間に堂々と。落書きに良い印象を持っていなかったが、元々美術には興味があったので僕は参加することにした。この時、僕はまだこの企画を落書きの延長線として捉えていた。イベントが始まると僕は見回りの仕事を任された。歩き始めると今回キャンバス代わりにになっている壁の大きさに驚いた。一区間縦4 m、横5 mもあり、道幅が狭いのでより一層大きく感じた。太陽の光の下、絵を描いている光景は新鮮だった。また、普段完成した作品しか見たことのない僕にとって、下書きの状態から絵を見られる事は嬉しかった。

アーティストの人と会話する事も出来た。「なんで参加したのですか？」と尋ねると「今度、個展を開くことになったからその足がかりに、とって。」と答えてくれた。街中に絵があれば嫌でも目に付く。たしかに宣伝にはもってこいだ。では、他に外で描く利点は何だろうか。それは、通りかかった人に感想を言ってもらえたりできたり、逆に描き手は

絵に込めたメッセージであったり、テーマをより多くの人に伝えられる事が出来ることだ。だったら僕が街で見かけたあの落書きにも何かメッセージが込められていたものもあったのではないか。悪戯と決め付けて、見ようとしていなかったのではないか。ふと、そんな考えが頭をよぎった。

夕方、僕は個人的に絵を見に行くことにした。オレンジ色の優しい光に包まれた作品は青空の下で見た時とはまた違う印象を僕に与え、光一つでここまで変わるものかと感じた。そうか、こういったアートもあるのか。この時、街にある絵全部が、単なる落書きや悪戯ではないのだと感じた。

調べてわかった事なのだが、どうやら落書きは「ストリートアート」や「グラフィックアート」と呼ばれ、現代アートの一つとして認められてきているらしい。

キース・ヘリングという人がいる。この人は地下鉄の使用されていない広告掲示板に黒い紙を張りその上にチョークで絵を描くことをしていた。これも落書きのひとつだ。だが、ヘリングの絵は人々の共感を集め、今なお愛され続けている。最初、ヘリングのこの話を聞いたときに疑問だったことがある。何故キャ

ンバスじゃなく、地下鉄の広告版に絵を描いたのだろうか、何故愛され続けているのだろうか。「SOTW」に参加したことで、僕はわかったような気がした。それは、絵にメッセージが込められているからであり、多くの人に知ってもらいたいメッセージがあるからだ。僕が見た落書きも、何かを伝えたくて描いていたものもあったと思う。しかし、メッセージ性があれば迷惑をかけてもいいとは思ってない。悪戯や迷惑になる落書きに嫌悪感を抱くのも変わっていない。だが、そんな感情をもたなくてもいい落書きあることを知ることができた。コンポジションの人達が教えてくれたのだ。

ヘリングが絵にA I D S防止のメッセージをこめたように、何かを絵で伝えようとしている人はきつといる。コンポジションはそんな人達に耳を傾け、手助けしてくれる団体だ。もし街中でその人達の企画によって描かれた絵を見つけたら、是非立ち止まって見てほしい。その絵は何かをあなたに伝えようとしているはずだからだ。

(ふくおか ひとし)

福士弦太郎

北海道 札幌平岸高等学校

幼少時代から絵を描くのが好きだった僕の耳に、その噂はすぐに届いた。デザインアートという美術専攻のコースが、ちょうど僕の家近くの高校に出来たという話である。当時中二だった僕は、すぐさま志望校をそこに絞った。しかし、その辺りで美術専攻のコースがある高校は非常に珍しく、各地から集まった入学希望者に、倍率は四倍にまで跳ね上がっていた。僕は今までにない位必死に努力をし、そして入学する事に成功した。

そのコースは、各学年八クラスある中の一クラスだけを占めており、僕の学年の生徒、全四十人の中に男子は僕を含め六人しかいなかった。少し抵抗はあったが、絵を描くという共通の特技を持った人達との交流は、とても楽しかった。小中学校までにはいなかった、自分より絵がうまい人がクラスに沢山いて、初めて経験する事も沢山あった。しだいに僕は他の五人の男子とも、互いに打ち解け合える親しい友となった。

高一の夏、卒業後ほとんど会ってなかった中学時代の友達大勢で久しぶりに集まった。皆それぞれ新たな道を歩み始めていた友との再会に、僕達はおおいに盛り上がった。そして話題は高校の話へと移った。僕は皆の前で胸を張ってデザインアートコースに入った事を報告した。しかしそれを聞いた友の反応は、僕の想像していたものとは全く違うものだった。「デザインアート？オタクの溜まり場じゃん。」

皆が声をそろえて言った言葉に僕は唖然とした。他の高校生からデザインアートコースは、オタク達の集まりという風に見られていたのだ。

その日を境に、僕の周りの話し声が自分の事を話しているかの様に聞こえるようになった。なにか自分のクラスだけ、普通コースの教室から孤立している様な錯覚も覚えた。やりきれない思いでいっぱいになった僕は、しだいに学校を早めに切り上げ、別の学校の生徒と多く会うようになっていた。クラスの他の人を、別の世界の物として見ようと心掛けている自分がいた。ちょうどその頃から、僕は絵を描く事がだんだん楽しくなくなっていった。

高二の夏、僕は高等学校文化連盟（高文連）の出品作品を手掛けていた。一年の時に一度取り組んでおり、今回で二度目の出品となる。一年間ずっと学校で絵を学んできただけあって、画力は格段に上がっていた。去年納得のいくまで描きこんだ、少年が自転車に乗って道を駆け抜けている様子を描いた絵も、改めてしてみると構図や配色は単純で、自転車や人の体もデッサンが狂っていた。

僕は机に向かい、アイディアスケッチを描こうとした時、ある異変に気が付いた。何も浮かんでこないのだ。去年は描きたいものが沢山ありすぎて、アイディアスケッチからどれを描こうか迷ったくらいだったのが、何を描けばいいのか全く分からないのだ。僕は愕



然とした。結局描き始めた作品はまとまりのつかないゴチャゴチャした絵で、完成品は去年の明るい絵とは反対にどす黒かった。それは描いていた時の僕の心を映し出していた。目標を見失いかけている自分を再確認した。

高二の秋、演劇部に入った同じ高校の友達に誘われ、彼の出る演劇を見に行った事があった。その演劇は僕の想像を超える程、楽しく素晴らしいもので、僕は心から感動し、気持ちがとても明るくなった。だが、それと同時にとてもみじめな気持ちになった。そこには入学当時、自分が思い描いていたような未来予想図があったのだ。仲間内で人を感動させるものを作り上げ、共通の達成感に浸る素晴らしい笑顔があったのだ。僕もあそこへ行きたいと強く思った。思うたび心が痛んだ。

何もかもうまくいかない日が続いていたある日、僕はクラスメートの男子となんとなく学校に残っていた。その日は特に何の用事もなかったので、いつもなら真っ直ぐ帰るのだが、話しているうちに盛り上がり教室で馬鹿話を続けていたのだ。ついこの間まで作品の締め切りに追われていたため、こうして何の目的も無く気楽に残ったのは久しぶりだった。そのうち他の生徒は皆帰り、教室に残っているのは僕達だけとなった。その時僕は思いつきで、そのような時じゃないと出来ない様なある事を提案した。

「この大きな黒板に皆で絵を描こう。」

僕達は誰もいない教室で黒板に絵を描き始

めた。皆それぞれ個性のある絵で、物語の様にワンシーンずつ描いていった。授業では描けない様な馬鹿な絵も沢山描いた。それを見て馬鹿みたいに笑った。忘れていた何かを取り戻した気がした。描き終わった後の黒板は虹の様に綺麗な色をしていた。それはその時の僕の心を映し出していた。

「アートだな、こりゃ。」

皆でそう言った。他の人に感動を与えられるものだけがいい絵ではないのかもしれないとその時思った。今は自分達で笑い合える様な、そんな絵で十分な気がした。これからの目標は、人に感動を与えられる様な絵より先に、まず楽しんで描く。そこから始めようと思った。

(ふくしげんたろう)



星川 葉

北海道 札幌平岸高等学校

雨粒は、細い線になり、自分の目に映る景色に線を引く。その線は真っ直ぐであったり、風に押されて曲がっていたりする。その細かい線を見れば、誰でも「ああ、雨が降っているな」とわかるだろう。だが、雨降りの絵を描く時、ただ縦に白い線を引いても、なかなか雨になってはくれない。

高校一年生の夏、高等学校文化連盟（高文連）の展覧会に出すために、「雨天中止」という絵を描いた。運動会の日に雨が降り、がっくり肩を落とす子や、天を仰いで嘆く子…そんな活発な少年たちを尻目に、一人ガッツポーズをする少年。運動を嫌う子供がメインという、少しどんよりした絵。ポツポツと降り始める雨を描くのに、ずいぶんと手間取った。

まず、定規を少し浮かせて、白い絵の具ですーっと線を引いてみる。油絵の具はぼつたりしていて、線の太さにムラが出る。がたがたした太い線は、どうしても雨には見えない。かといって油で薄めると、ほとんど見えなくなってしまった。家にある画集から雨空を探してみると、ノーマン・ロックウェルの「コー

ルド・ゲーム」が目に留まった（図1）。寒そうに身をすくめる選手の手前で、3人の審判が残念そうに空を見上げる。薄暗い雲の片隅に、青い空がわずかに見え、そこに、ぼつりぼつりと雨が降り始める。ずっしりと重そうな雲から落ちる白い線は、雨以外の何ものにも見えはしない。

不自然な白い線は、どうすれば雨になるのだろうか。この絵を見ると、雨を描いた白い線は、別段きれいに整っている訳ではない。細くなったり途切れたり、不規則に変形している。シャープな線というよりも、ごつごつした不器用な線だ。雨粒が落ちるとき、大幅に変形しながら落ちる訳ではなく、途切れるはずもないのだが、どうしてこんな自然な雨に見えるのだろうか。

絵は、本物よりも本物らしく描くことがある。普通に考えるとそんなことはあり得ないのだが、本物とまるで同じ絵なら写真と変わらない。本物を注意深く観察し、そこから抽出したわずかな本物らしさを微妙に強調して形にすると、絵になる。

例えば、リンゴを一つ描くとする。そこで、見たままのリンゴをただ描くのではつまらない。リンゴの赤み、斑点、傷、形…そういった目につく特徴を、強く。背景との区別をつけるため、色の違いをくっきりと。わずかな点を強調するだけで、絵は、実物よりもいっそう本物らしくなる。

だが、はっきり強調するだけが本物らしさを出す訳ではない。《コールド・ゲーム》は、淀んだ空気の向こう側が、どことなくぼんやりしているように見える。この絵はまだ降り始めだが、ざあざあと小降りを通り越せば、背景だけでなく、中心となる物や人物まで、まるで画面が曇ったようにぼやけてしまう。しかしその曖昧さが、「雨」の存在を表すのだ。実際に雨の中に立って見るよりも、薄暗く、ほんのりくもったガラスを通したように白んで見える。

雨粒は、どうしたら雨粒らしく見えるのか。真っ直ぐで人工的な線を引いても、雨には見えない。ぼこぼこした太い線も、大粒の雨というには少し無理がある。ちょうどいい具合

の線は、見たまま描こうとしても描けなかった。誰が見ても雨に見える、本物の雨よりも雨らしい雨。自分の記憶にあるイメージからは、それはできなかった。

ちょうど雨の降った日、家の窓から雨の降る庭を眺めてみる。ざあざあとうるさく降る雨は、思っていたほど白くはなかった。陰になっている暗がりでは細かく線が入るが、大部分の明るいところでは、目を凝らしてよく見ないと雨が降っていることに気づかない。陰の濃いところにだけ白い線をくっきり入れたら、雨に見えるだろうか。

いろいろと書いてみたが、所詮自分の思ったことをただ述べただけだ。本当のこととも限らないし、その考えに合わせて雨を描いてみて、果たして雨になるかどうか。もう少し、雨の描き方を考えてみようと思う。

(ほしかわ しおり)

応募作品には図版がありますが、著作権等に配慮して、本作品集では掲載していませんのでご了承ください。

眞鍋苑子

群馬県 共愛学園高等学校

こころの絵本と題されたこの大会は、高校生の心の内を絵と言葉とによって広げあう、絵本の甲子園といえるものだった。絵本という小宇宙を大きなスクリーンに投影しながら、多くの人達に読み聞かせをするのである。それは単なる朗読ではない。また、自分が選んだBGMにより、その会場の空気を演出することによって、さらに奥深く自分の心を表現するための演出ができるのだ。そんな自分だけの空間を多くの観客と共有することによって、私の言葉や色彩はより深みを増して膨らんでいくように感じた。絵本において、絵も文字も説明であってはいけないのだ。受け取る側の心と溶け合うような、柔らかくて自由にその世界と行き来できるようなものでなくてはならない。絵も文字も、説明するための手段ではなく、もっと底知れない世界へつながる扉を開く鍵にすぎないのだと思う。

そんな貴重な機会を与えてくれるこの大会に、私は三年間参加することが叶った。自分の心の成長を一年一年はつきりと実感することなんて、中々出来ることではない。しかし、この大会に参加することで私は、一年一年手に取るように大きな心の変化を感じ取ることが出来た。一つの制作を通して、自分の心のしるしを残すことが出来たのである。私の絵本との、自分の心との対話を、三年間の締めくくりとしてここに記したいと思う。

絵本作りなんて、見当もつかなかった一年目。初めて取り組む課題にとまどい、何も手につかない日々が続いていたある日、私が絵本と向き合うきっかけを手にしたのはふとした日常の場面だった。ある日、学校でよほど疲れたのだろうか、いつもより早くに眠ってしまった弟の姿を見つけた。こんな風にすやすやと眠る弟の顔を見たのは久しぶりだったので、何だか微笑んでしまう自分がいた。すーすーと規則正しく聞こえてくる寝息を心地よいと思った。そして表情に目を移した時、暖かい色でこの顔を描きたいと思った。言葉が生まれそうな気がした。そんな風にして私の一年目

の絵本のテーマは、人が眠りに落ちてゆくように自然に「ねむり」に決まったのだった。この絵本の制作を通して、私の中で形にしたい絵本の定義のようなものを見つけることができた。それは、「自分が心地よいと感じるもの」を創るということだった。色彩、言葉、読むリズム…それはまさに寝息のように穏やかに調和しながら、人の心にゆっくりと浸透してゆくものだった。そんな心地よさは、私の絵本作りに対するこだわりとなったのだ。

二年目を迎えた。「ねむり」を通して絵本との関わり方を少しだけ身につけた私は、より絵本と自分の心との距離を縮められていた。そんなことからか描きたいテーマはすぐに決まった。いつ、どんな気持ちの時に私の心がそのモチーフを弾き出したかは覚えていないのだけれど、ただ漠然と、「水」を描きたい、そう強く思っていた。多分、その時の私の心の状態に、水という物質が一番近かったからじゃないかと今になって考える。そうして私は、深く深く水を見つめはじめたのだった。水道の蛇口をひねって、手でその感触を味わったり、コップに水を注いだり、その注がれた水をわざと零してみたりを繰り返しながら、何日も水と戯れた。家の近くの川を眺めたり、時には泣いている自分の涙まで観察したりして、多分周りの人間からは何をしているのだろうと思われたに違いない。そんなことはお構いなしに水と過ごした時間の中で、水を深く見つめる作業は、そのまま自分の心を見つめることにも繋がったのだ。

一年前、自分の心との関わり方をようやく見つけ出した私は、今度はその奥深くへ進むことを許されたような気がしていた。自分の中にある本当の気持ちをまっすぐに見つめることなんて忘れかけていたのかもしれない。揺れながら飛沫を上げたり、滴り落ちる一粒一粒の水滴を覗き込めば、見つめる私の心の中身が、ぶくぶくと泡になって咽もとまで浮かんで来て「外に出たい」と叫ぶように弾けはじめたように思えた。ようやく、私の心と水とがひとつになれた瞬間だった。私は、そ

んなイメージを様々な色や形にしていって。するとそこには自分の真実を見つけ出したいという切実な気持ちが溢れるように言葉に変わり始めたのだ。こうして「みず」は、心の中に潜りこみ、漂うように完成したのである。

初めて向き合う自分の強い感情に負けそうになりながら、時にはあえぐように画面と向き合った。そんな苦しい日々を支えてくれたのは家族であり、先生であり、部活の仲間であった。自分の心を見つめるという作業は始めて味わう孤独なものであったが、それ以上に人の温かさをここまで感じたことも無かったように思う。

そして、「みず」の制作には、もう一つ、私を支えてくれた存在があった。それは、この絵本の発表にBGMとして使ったある一つの曲だった。一年目はすべてがはじめての経験で、BGMに関しては深く拘ることが出来なかったが、実は水というテーマに決めた時から、私には使いたい曲があったのだ。その曲は、ある一人のアーティストが彼のバンドのギタリストであった親友にむけての愛情と、彼を失った悲しみを乗り越えるために書かれた曲で、彼らに、彼らの音楽に出会っていなかったら、今ここに存在しなかったかもしれない私にとって、私の心のすべてをあらわすならば、二人の存在はなくてはならないものだった。だから、彼らに届けたい感謝の気持ちも込めて、どうしてもこの曲が使いたかったのである。こうして、私の心の内のすべてを内包した絵本が完成した。発表した時には、思わずステージ上で泣いてしまいそうだった。会場内に響き渡る彼らのメロディーの中で、心の内を語る事が出来る…これ以上の幸せな時は私は知らなかったように思う。私はほとんど私の心を丸ごと取り出すように表現することを、絵本の上で実現出来るようになったのであった。

そうして向かえた三年目。最後の大会である。絵本と私の心との間にはもう何の隔たりも無くなっていった。感情の自由を手に入れたような気がした。そして私が選んだテーマは、この三年間で

幾度見上げたかわからない大好きな「空」だった。自分と自分の心との関わり方を覚えた私が、今度は、自分の内と外との境界線をなくしたいと思ったのである。私たちを包み込んでくれている自然に、もっと近づくことは出来ないだろうか。自然の空気の中に自分の心を映し出すことが出来たなら、もっと多くの人の心に自分の想いを届ける事が出来るのではないか、独りよがりの世界ではなくて、大きな大きな空のように誰の心にも広がってゆくような作品を作ることが出来るのではないか、そんな想いで制作したのが、私の最後の絵本であった。

果たして、自分の作品がどこまで多くの人の心と共鳴することができたかは分からない。分からないけれど、その空間において確かに、自分の求める心地よさを作り出すことができたと感じた。自分の呼吸と、色彩と、言葉とが、確かに一つになれたような瞬間があったのだ。

人の想いと、どうしてこれほどまでに大きくて強い力を生み出すのだろうか。それが愛であるならば尚更、どんな世界をも動かす力を秘めているのだ。私は、色や、線や、形や、言葉を使って、そんな“想い”を具現化していく道を選んだ。それは答えも無く一歩先に道が続いているのか崖なのかさえ分からない程果てしなくて、多くの人から見たらくだらないほど途方も無い旅になるだろう。心の絵本づくりは、それを私に教えてくれたと同時に私にこの道を進む勇気をくれた。それは、自分が心地よいと思える世界に、自分の呼吸のままに歩いて行けばいいという、当たり前だけど最も難しかった一つのシンプルな答えだったのだ。

(まなべ そのこ)



真鍋苑子《空》(絵本)より

三浦菜々子

東京都 女子美術大学付属高等学校

黒は黒である。しかし、オディロン・ルドンの銅版画の色は決して単なるモノクロームとしての黒ではない。この夏に開催されたルドン展（注1）で本物の作品に出会い、そんなことを思った。

私たちは黒という色に、普段どのようなイメージや感覚を持っているだろう。闇だろうか、それとも何とも言いえない重い空気のようなものだろうか。私たちは一人ひとり違った答えを持ち、それにより多くの黒へのイメージは広がっていく。

私は黒という色に、魂の透き通るような張りつめた緊張感を感じる。たとえば、一篇の美しい詩が、鋭く私たちの胸を打つ瞬間。あの瞬間は、黒と白の世界からしか生まれてこない。そして、ルドンの銅版画の黒と白の世界にもまた、精緻で幻想的な緊張感があり、私たちの胸を打つ。

銅版画というものは、鮮やかな色彩を完璧に拒むからこそあのように特有の美しさが生まれるのだとずっと思っていた。そんな私を、ゆるやかに、しかし激しく動かしたのは、ブリューゲルなどの絵に突き動かされた、作家フローベルの小説『聖アントワーヌの誘惑』（図1）の幻想場面を描いた銅版画の黒である。

画面の黒のその奥には、無数の色が煌めいていた。黒は、黒ではなかった。それらを前に唾然と立ち尽くす私に、「私たちは、ここにいるの、あなたにも見えるでしょ？」と、色たちは次々と話しかけてくるように思った。

それらの作品は、まるで覗き込めば覗き込むほど、美しさや謎や痛みが見え隠れする人間の瞳のような深さを持っていた。黒の中から透明な赤や強い青、鮮やかな緑やまばゆい黄色が現れてきた。私は、言葉を失った。私のところにその衝撃が追いつくまで、長いこと立ち尽くしたままだったかもしれない。あらゆる色が、その一色の中に含まれているのだと、私は思った。

そして、その隠された色は、見続けていた私を幸福にした。画面の奥深くで息づく色に気づき、あらためて、堆積した私自身の日々を振り返ってみると、確かに、沢山の光を見つけることが出来た。

知らず知らずに手にしていた幸せも、思い込みや思い違いのため見えなくなった優しさや喜びも、美しい光として私の奥深くにあった。おそらくルドンという画家は、本当に純粋な画家だったのだろう。ルドンの作品に触れた人間は、彼の魂に触れることで素直な気持ちになっていくのだ。

ルドンの作品には驚くほどの生命を感じる。（図2）幻想的な作品の中から浮かび上がる、強く、儚い命。かすみ、二重にも三重にもなりそうなイメージの中で、骨の重みや、ただよう血の匂いを。銅版画に描かれたキメラやセイレーンなどの奇怪な混種の怪物たちも、人間も悪魔も、様々な種類の植物や動物たちも、みな一様に生きていて、今もひそかに呼吸をし続けている。

ルドンは、生命を追い続け追い続け、その

ことによって作品を創り続けてきた画家なのだ。輝く光を、闇の黒を、命に含まれる死、もしくは死に含まれる命を、その美しさを、目に見える形に体現しようと、現実と幻想とを使ってルドンがひたすらに描いた数多くの作品。私たちが彼の作品に惹かれるのは、私たちがまた彼と同じように、それらを求めているからにはほかならないのだろう。

彼の魅力は、銅版画にとどまらない。ルドンの描くパステル画や油彩画は、まるで画面からその光が木漏れ日のように溢れてしまうのではないだろうか、と思わせるほどの色彩に満ちている。

ルドンが晩年によく描いた花。彼の中の光がそのまま花として開いたような、柔らかな輝きに満ちたそれらの花々。私はこのモチーフがとりわけ好きだ。「なんという光なのだろう、そして、なんという色なのだろう」と、私の中にも花が開き、震えているような気持ちになる。

ひたすら自然の美を追い続けたルドンは、ここに至って初めて描くことが出来たのではないだろうか。自然から語りかけてきたそのままを、その美しさを。

私は、ルドンの魔法にかかってしまった。そしてそれは、限りない喜びとなって私のところに広がっている。

時間は痛みや輝きをとめない、とどまることなく瞬時に飛び去って行くけれど、記憶

というあまりにも個人的なものではなく、目に見える何かの美しい形としてその軌跡を残すことが出来るのなら、どんなに素晴らしいことだろう。

私は今、美術の学校に通い、毎日絵を描きながら自分自身と向き合い戦ってはいるものの、美しさや哀しみや喜びを、ひとつの確かな形にすることは到底出来ないでいる。まだまだ自分の中から込み上げてくる情熱や感情の整理が出来ず、おぼつかない表現力に戸惑うばかりで、いつか、光を掴むことが出来たらと、今はただ苦しむよりほかはない。

それでもいつの日か、ルドンのような姿勢で絵に向かう自分を見出す日が来ることを願っている。

(みうら ななこ)

注1：展覧会『Les noirs de Redon ルドンの黒』  
会場：Bunkamura ザ・ミュージアム、開催期間：  
2007年7月28日8月26日

図1：『現代世界美術全集 10 ルドン／ルソー』(P.116)  
出版社：株式会社集英社、編集者：後藤茂樹、発行者：  
堀内末男  
1971年8月25日第1刷発行

図2：『澁澤龍彦 幻想美術館』(P.75)  
出版社：株式会社平凡社、監修・著書：巖谷國士、発行者：  
下中直人  
2007年4月12日初版第1刷発行

応募作品には図版がありますが、著作権等に配慮して、本作品集では掲載していませんのでご了承ください。

村田綾乃

熊本県 大津高等学校

雲の流れを見て、植物の成長を感じて、日が沈んで、今まさにそこには時間が存在するのだと実感する。こうして文を書いている、いきなり筆が止まってしまっていて悩んでいる間も時間では過ぎている。「学生は忙しい」とよく耳にするが本当である。1日24時間では足りないのだ。しかしどう頑張っても時間を増やすことや止めたりすることはできないのだ。いや、本当にできないのだろうか。

美術の授業でコンセプチュアルアートというものを学んだ。絵画というよりパフォーマンス、立体、写真など多彩な表現をする美術である。強烈過ぎる作者の訴えと大胆な発想が私たちを圧倒する。何故か謝りたくなるくらいだ。私たちもコンセプチュアルアートをつくり上げることになった。身近な問題を取り上げる人もいたり、概念作品の中にもリズムが生まれたり、それぞれだ。私はというと、みんなより遅れをとっていた。どうしてそんなにアイデアが浮かぶのか不思議だった。

焦り出した時、思いついたのが氷だった。氷を思いついたのには昔のある体験を思い出したからだ。地域の夏祭りでの出来事である。様々な屋台が立ち並ぶ中、私の目を引きつけたのは食べ物でも金魚でもなかった。大きな

氷の中に食べ物がいくつか固められており、取り出せたら無料でもらえるというものだった。屋台で売られている食べ物より氷の中の食べ物の方が魅力的に思えた。その時の印象が強く、今でも思い出す時がある。何気なく日常で使っている氷だが、よく彫刻として飾られたり、大きい氷を見るととても美しく見える。氷の反射や角度によって輝き、宝石のようだ。

氷を使った作品をつくりたいと思った。しかし、氷を作る前にそのモノの意味について考える必要があった。もっと意味のある作品にしたいと思った。

氷をつくり上げる時とても時間が必要なことを知った。普段は意識せず、いつの間にか出来ている氷。意識すると長い時間を必要としていた。そう思った瞬間、私は閃いた。氷は水を固めるだけでなく、その何時間という時間、そして固体となっている数時間をも固めているということ。そこだけ時間のズレができていたみたいだ。そして欲張りな私はもっと時間を止めてやりたいと思った。作品の美しさ、ということも考え、水の中に花を入れて固めることにした。氷の性質のせいか、それとも花自身のせいか、氷と花が別々の時



より綺麗に見える。透明な囲いの中にあることで花が誇らしげに高貴に満ちた表情で自分を見せているようである。また、冷気のせい  
か花に冷たさがあり、氷の頑丈な守りがあるため、威厳さえ見える。美しいモノを閉じこめたいという私の欲望がとても表れている。氷という時間のズレの中閉鎖され、同時に平等に与えられたはずの花の時間を止めてしまい、なんだか残酷なことをしてしまったと思う。

発表当日は氷を4つつくった。それには意味があり、「春夏秋冬」を表現したのだ。春にはアネモネを、夏にはヒマワリを、秋にはコスモスを、冬にはドライフラワーを。時間の流れをよりわかりやすくするように日本人ならではの四季を取り上げ、季節それぞれの美しさと、いずれ去っていく儂さを氷の溶ける様子と花が枯れていく様子で味わってほしい。しかし溶けた後の水をまた凍らせることができるようにまた春が訪れ私たちに感動を与えてくれる。その感動は春が永遠に続いているからではなく、春が去っていくからこそ、また訪れた時にうまれるものである。それは作品にもあてはまることだ。なにも一生残る作品でなくてもいい。残らないからこそその美と

感動があるのではないか。もう出会わない光景かもしれない、一生見られないかもしれない、だからこそ必死に自分に刻み込もうとする。後々、思い返し、少々美化され、以前とはまた違った気持ちを持つのだろう。形はないが、永遠に残る作品、忙しく過ごす中で忘れてしまうのか。何かしらキッカケがあり、ふと思い出す、その時また作品は生きるのだ。

私は今後も形の残る作品をつくり上げていく。その中でまた形としてではなく、その時、その空間、その時間にだけに存在した永遠に生き続ける作品も残したい。

(むらた あやの)



村田綾乃《四季》2007年 水(氷)・花/花氷  
7×7×19cm

山口知廣

東京都 筑波大学附属高等学校

化石だ。

目の前にあるそれは明らかに絵なのに、私はそう感じた。

その絵は私が今までに見た、どの絵にも似ていなかったし、絵であるかどうかも怪しかった。それはそのもの自身で生きていて、何かの折にこの暗く蒼い画面に塗り込められたようにしか見えなかった。『生き生きとした』というより『生々しい』骸骨の足元で、その眼窩を見上げている私と同じ人間が、これを作れるとは到底思えなかった。

「私みたいに足元でこの絵を見上げる事しかできない人間より、こちらの方が偉い」

瞬時に私はそう、思った。

人間が百人以上入るだろう近代的で、明るく、友好的なその部屋いっぱい広がる大きなその壁画の中央の眼窩以外、その時の私はその絵をおごなりにしか見ることが出来なかった。何処か解らない場所で奇妙に首を傾げて浮き上がっている骸骨が、いつ、その眼窩から眼を離れた私を、逆に鑑賞するのかが気が気ではなかった。

『絵を鑑賞する』というのは、考えてみるととても不思議な動作だ。見ず知らずの人間の内部を、公然にじっくりと覗いてしまっているようなものではないのだろうか。赤の他人の思想や、感情が絵には惜しみも無く費やされている。それなのに、私たちは見たこともない人の思想や感情を見て、『凄い』とかではなく大半の人は『巧い』や『綺麗』と言うその全てを知ったような言葉を褒め言葉として使う。

私はその絵を『綺麗』だとは思わなかった。その『綺麗』という形容詞が、この絵には全

くにあっていない感じがした。『良い絵』かどうかは、私には未だに見当もつかない。ただ『凄い』と思い、そうして『怖い』と思った。実際の絵を前にして、描く事のエネルギーに気圧されてしまった。

後で知ったその絵の題名は、「明日の神話」。岡本太郎が四度も同じ構図で段々と成長させて、此処まで大きくした。メキシコの地で風雨に晒され、自然を貪欲に吸収してひび割れた状態でこの壁画は発見された。何とか小さな人間が、その壁画の上に慎重に何人も乗って、ひびに沿って何百の欠片に分解して、日本に呼び戻した。

彼が構図を変えなかったことから覗える様に、この絵は体から湧き上がる衝動で描かれた物だというのは、この絵の前に立ったときには既に明らかだった。四度も描いたと言うのは、同じ構図のまま、人を飲み込むほどの大きさにするための手段でしかなかったのだと思う。岡本太郎その人を切り張りして出来たように、この絵には『絵に対する褒め言葉』はことごとく似合わないように思えた。

私はその話を聞いて、「なにが明日だ」と始めに思い、もう一度、その絵を見てみた。やはり、『明日』の「あ」の字も私はその絵に見ることができなかった。どうしたって、私は中央の骸骨が『明日』に向かっているようには見えなかった。私が観た彼らの姿は、限りなく明日からは遠く、『時間』の概念の無い、荒涼とした土地に浮かんでいた。再度の挑戦は、さすがに一度目ほどの衝撃は無かった。怖いと思いながらも「これは絵だ」と何回も自分に言い聞かせて、油が切れたような自分の首を、大きな画面全体に向かってゆっくり

と回す事ができた。

骸骨の下には、思い思いの色に自身を染めた魑魅魍魎が楽しそうに傾いで、皆一様に同じ方向を目指しているように見えた。けれど、ただの楽しそうな絵に見えないのは、中央の諸手を無邪気に挙げた骸骨を筆頭に、何処か無防備な哀しさを湛えたまま、その画面に塗り込められていて、そうしてフォルムが奇妙で怪しく、「可愛い」と一言では括れない形をしているからのように思える。

その言葉では括れない感覚は、一人の人間を言葉で表そうとして、出来ないもどかしさとなんら変わりがない。そうして、やはり私には、それら全ての生き物が『塗り込められた』ようにしか見えなかった。

今まで私が見たことのある絵は、描いた人が有名であっても、有名でなくても、その人が「こういう絵を描きたい」と思って描いた跡が絵の上にちらちらと見え隠れしていた。そうやって描かれた絵には「かくあるべき」という形が作者の頭の中にあり、その形に近づけていくために何度も何度も塗りなおされたり、修正させられたりして、ある程度の妥協の上に来上っていた。そうしてその妥協の前には、多かれ少なかれ『他者の目』が作者によって含まれる。

いかに頭で描いた風景が、現実のキャンバスに表現できたか。が、皆が言う「巧い」であったり、「良い絵だ」と言われる基準なのだと思う。私が今まで見た絵は、現に、綺麗で心地の良い輪郭を持ち、微笑みかけてくるような柔らかな態度を鑑賞している人たちに向けていた。とても無害で、ひっそりと、ただそこにある。

けれど、この絵はそういうものが当てはまらないものだ。

鋭い輪郭に、果ての無い背景の蒼。鑑賞している物など、「小さすぎて見えない」と言わんばかりの態度。眼を離れた際に、キャンバスから身体を引き剥がしそうな脅迫的な空気。眼に直接『力』というものを叩き付けられた様な、存在感。

きっと、岡本太郎氏はある日、衝動のみでぐわりと筆を持って、いきなりこの構図をキャンバスに叩きつけるように描いたに違いない。流石に私が見たキャンバスに描くのは、大きすぎるだろうから、今回「見つかった」とされる零号の細長く白く塗りつぶされたキャンバスに描いたのだろう。計算も、何かに近づけようとする細々とした技巧も、その絵には使われていない。ただ、衝動と、ほとぼしる恐ろしいまでの熱気を発する力のみで描かれている。

この絵の中に、他者の目は無い。

だから、はしゃぎ、ほとぼしり、迫ってくる。

この絵を「巧い」という事は、人を見て「巧い」と言うのと同じ感覚で言葉が響く。「綺麗」でも、「心地よく」もない。

ただ、飲み込まれる。

こういう絵を描きたい。とは思わない。けれど、こういう風に絵を描きたい。とは、強く、思った。

(やまぐち ちひろ)

渡邊瑞紀

北海道 札幌平岸高等学校

埃被った本棚の中、一冊の画集を見つけた。昔母が買った何十冊もの古本が家中の本棚の中にまとまって置いてある。私はそれらに手を取ってみるのは初めてだった。

画集は三十年も前に開いた個展で販売されたものらしい。「岩橋英遠」黄色く変色した表紙にはそう書いてあった。何気なくめくった。私はその画家を知らなかったから、その時は単なる暇つぶし程度の気持ちだった。目次から始まり、編集者のごあいさつや岩橋英遠の紹介、前置きが続くが私はそれらを飛ばして画家の絵を見るためページを滑らす。目に入ったのは大きな幹。巨木だった。西洋画か。いや日本画だった。まるで西洋の抽象画のように大雑把だったが、それでいて繊細で、壮大だった。思わず見つめた。そしてまたページを滑らし続けた。美しかった。日本画といえど古風で、どこか重苦しいという私の感覚があつという間に崩れ落ち、消え去った。

その中で私が一番目を留めた作品がある。昭和十三年に描かれた「土」という絵だ。この絵には言葉では言い表せないものを感じた。私は日本画について詳しくはなかったが、この作品はどうも静かに思えた。その絵は二枚で一つの形状になっていて、それぞれに白い蛇と鮮やかな緑の蛙が描かれていた。蛙にとって蛇は天敵であるはずなのに、静かだと感じ

たのは何故だろう。そう思ったが私は、これはどちらかに死が訪れることを意味しているのかもしれないと考えた。蛙は蛇に食べられて死んでしまうかもしれない。蛇が蛙を食べる前にまた誰かに殺されてしまうかもしれない。私の頭はどうしても死を連想させてしまう。それはあの時から今までずっとだ。私は目を伏せた。

私はあの時から生き物の死に敏感になった。今年の春に、二歳の頃から飼っていたインコが病気で死んでしまった。死に目には会えなかった。十四年間共にいた家族の体にそっと触れた。その瞬間心臓が信じられないくらい大きく震えだした。鼓動が速くなって冷や汗が出た。その体はすでに冷たく、首は不自然に上を向いたままの形で硬直していた。それ以上、動かなくなった家族に触れることができなかった。

私は顔を上げる。あの時から鳥籠から声が聞こえなくなった。鳥籠は住人がいないまま今日まで、同じ場所で変わらぬ姿でそこにある。私は鳥籠を視界にいれなくなった。この鳥籠を見てしまうと、無性に恐ろしくなる。冷たく硬直した姿は、死そのものだった。家族を失ったことはとても悲しい。だがそれ以上に死に直面した体験が、私に恐怖を与えていた。私はゆっくり「土」を見つめる。「土」

は相変わらず静かで、無音だった。「土」は本当に死を意味しているのか。ふとそう思った。が、同時に私の目は蛇と蛙を通り越し、彼等を取り巻くものに向けられた。よくよく見ると、彼等の周りには色々な植物、生物がいた。彼等以外にも生物がいたのだ。私は画家が何を考えてこの絵を描いたのか、わからなくなった。そもそもこの絵は死を描いているのだろうか。考えているうちに何故だか私は、ごく最近目にした家族の死を思い出していた。

私の家にはもう一匹家族がいる。小学生の時に病院から引き取った犬だ。前の飼い主から虐待を受けていたと聞いた。子供ながらに、酷いことをするものと怒っていた記憶がある。それから七年も過ぎて今年の秋に、病気でもう長くないことを告げられた。だが告げられる前から、私は覚悟を決めていた。私だけじゃないかも知れない。春に死んだ家族を、皆忘れることが出来なかったから。それからの数日間が辛かった。日に日に弱っていく姿を見ていられなかった。いっそ殺してしまった方が。と何度も思っては自分を憎んだ。そしてある日、私の目の前で家族が死んだ。呼吸が出来なくなって、苦しそうにもがく姿を見た。ゆっくり死んでゆく姿を私は見た。だんだん冷たくなってゆく体を撫でた。開いたままの目を指で閉ざせた。

何故だろう。「土」について考えていると、無性に思い出される。忘れかけていた家族の思い出が、蘇る。私は再び「土」を見つめる。そして見つけた。何の植物だろう。白く、若々しい芽をゆっくり伸ばしている。それは、最初は気付けなかった、生の姿だった。そしてもう一つ。蛇と蛙、彼等の周りを、白い線が駆けていた。もし最初の頃に気付けたとしても、特に気にしなかつただろう。だが今の私にはこの何本も伸びる白線が、気にせずにはいられないものになっていた。画家が何を思って白線を引いたのかはわからない。だが私はこの線の一本一本が、生きてるように思えた。これは生き物の一生だ。長く伸びる線。途中で途切れた線。そして気づいた。蛇や蛙だけが、この絵の主役な訳ではない。岩橋英遠はこの世に生きているもの全てをこの絵に集めたのだ。

岩橋英遠は既に亡くなっている。だが彼の残した「土」は私に大切な事を教えてくれた。私も彼のように、生きた軌跡を誰かに届けたい。

(わたなべ みずき)

渡邊佑華

熊本県 大津高等学校

私の地元は、海沿いだが平地のない、辺り一面緑溢れる 田舎といったら…で思い出すような、そんな所である。 人口は少なく、大半は好々爺の皆さんだ。

車の通りが少ない（むしろ船の通りが多い）、静かで穏やかに時を刻む。その雰囲気、私はとても好きだ。

しかし、時々だが、どこことなく、少し淋しいと感じるときがある。人の声が恋しいというか。もっと、子ども・大人・老人関係なく一体できる、ふれ合える、笑い声溢れる雰囲気にしたい。

「活気ある町づくり」 そのために、私たち若者が出来ることは何だろう。

私が地元唯一の小学校に通っていたとき、ある先生が提案した。…「ロゴマークを作ろう。」

当時の私にはその意図がわからなかったが、きっと先生も先の私と同じようなことを考えていたのだろう。「活気ある町づくり」のために、この地オリジナルのキャラクターがあったら良い。

そのとき生まれた「みかんちゃん」は、ティッシュにプリントされ地域のオリジナルになり、また環境保全や交通安全などを訴える手作り看板に描かれた。色とりどりの看板たち

は、イラストが描いてあるせいかその場を明るくにぎやかにした。小さな活動だったが私たちは一生懸命だった。

そして現在、私は美術について学ぶことのできる環境にいる。美術館に展示されている絵画や立体の他にも、田舎にはない都会の様々なデザイン化されたものにふれることで、田舎と都会の文化のギャップをひしひしと感じた。

地元とは何もかもが正反対の、都会。今までにない人や建物の多さ、車の交通量（船がない!）。そして、何よりも私の目をひいたのは美術館を飛び出して我が物顔で町中に出現しているオブジェたち。ちょっとした広場や公園など、いたるところにアートが溢れている。

どこに行ってもとてもにぎやか。建物ひとつにしてもデザインされているオシャレな街並み。ふと見た時計塔だって、なんて変わった形をしているのだろう。

しかし、都会の情景に目を奪われる中、私は何かモヤモヤとした澄み渡らないものが渦巻くのを感じていた。生まれ育った田舎の美しい自然、透き通る空気、穏やかな時間…

それらを求める本能に近い意思。ここでは感じるものの出来ないそれら。

私たちは「活気のある町づくり」をテーマに村おこしを行ってきた。あのとき望んでいたのは、はたしてこのような雰囲気だったろうか。

今、都会を中心に最も重視されている問題。それは「環境保全」だ。まだ十分に使えるものでも、新しいデザインが開発されればそれを求めて、人は捨てる。地球は汚れる。溢れ出たデザインが環境を蝕む。オブジェたちは一体いつまで増え続けるのか。

都会と田舎の文化のギャップは、それと比例して環境のギャップをももたらしていた。あのモヤモヤは、この環境のギャップが原因だったのだ。

そんな中重視されるのが「エコデザイン」である。エコロジーとエコノミーに配慮した製品デザイン。これからの芸術に求められる考案。ギャップを縮めるための妙策。しかし、一度壊した環境を取り戻すにはとても時間がかかる。

今まさに「エコデザイン」の意味を一番に精神に叩きこまなければならないのは、むしろ緑溢れる田舎に住む、私たちである。

なぜなら身の回りには美しい自然が、まだこんなにも存在している。いきすぎた人間の意匠計画が不介入な場所を、先手を打って守っていかねばならないのである。それこそが、私たちに出来る「エコデザイン」であり、環境保全のための最短距離だ。

小学校の頃に行った看板作り。よく考えてみると、当時は地域を明るくすることを主旨としていたのだが、その内容はしっかりと環境保全を唱えていた。村おこしの一環で立ち上がったパワーは、実はしっかりとその礎となっていたのだ。

消費されるデザインを「エコデザイン」に。

今存在する自然を守り、エコロジーの第一線を歩む。それもまた、「エコデザイン」。

地球に対する慈しみの心が、新しい芸術を生みだし、美しい環境を再構築するキッカケとなる。それぞれの地域で始まる様々なデザインの進化を、環境保全と結びつく「手」にしていかなければならない。

(わたなべ ゆうか)

